

時宗の本作の和讃

多

屋

頼

俊

## 目次

一、金蓮寺の「和讃」と淨業和讃……………	七
二、(一)迎接、(四)無常、(六)五増上縁、(三)極樂、(三)釋迦、 (三)恩徳……………	八
三、(三)阿彌陀經、(四)涅槃、(五)八相、(六)末法、(九)滅罪、 (四)心品、(六)太子、(三)本願、(四)光明……………	八七
四、結……………	二三

## 一 金蓮寺の「和讃」と淨業和讃

「淨業和讃」わ周知のごとく、上巻に源信僧都の極樂六時讃お載せ、中下二巻にわ源信僧都の來迎讃、一遍上人の別願讃以下、全部で三十二篇の和讃お収めている。この書の凡例に、

一、中下ノ巻ノ讃ノ如キ、古來、本（作）新作卷ヲ分チ、又三十首ヲ三十日ニ配リテ讃シケルトナン。然ルニ中古ヨリ例時ニ行ズルニ用不アリ。今ハ其本ト新トヲ簡バズ、便宜ニ從テ次デヲナス（下略）

一、阿彌陀經ヲ小經ト標シ、二尊教ヲ二教ト題スルコト、且ク句ヲ成ン爲ニシ、私ニ改ムルニハアラズ。又標目ノ圈中ニ本・新ト標スルハ、彼本作・新作ノ古傳ノ廢亡ヲマモルノミ

等とある。日輪寺感徹領應の序に「吾祖 一遍上人、以悟眞大師六時禮讃、爲不斷稱名之助業、且以恵心僧都來迎讃、及古聖和讃、配次日々禮拜。爾後爲一宗勤行規則矣（下略）」とある、—この序文にわ、いささか疑問に感ぜられる點もあるけれど、それにわ今わふれないでおく—一遍上人が來迎讃及び古聖の和讃お日々に配次して、稱名念佛の助業にせられたので、それが時宗の勤行の規則になつた、というのである。ところで淨業和讃にわ、二祖他阿、三祖智徳、七祖託阿等、一遍上人よりも後の人の和讃が入つてゐる。それらわすべて「新」と標してある。そうすると、本作と言われるものは、一遍上人よりも前の「古聖の和讃」ということになるはずである。淨業和讃わ時宗の傳統に従つて編集せられたもののものであるが、その刊行年次が新しいので（（前題の序に文政乙酉（八二〇））そのままにも信用しかねる點がある。

時宗の四條派の本山金蓮寺（今わ京都府千本北大路上ルにある。大正の末年までわ新京極四條上ルにあつた）に古い和讃集があるとゆう話お牧野躰山氏から聞いたのわ昭和十年頃であつたが、昭和十六年の暮に、橋俊道氏の好意に依つて、直接に拜見することができた。

この和讃集わ、黒の漆塗の箱に入つていて、箱の蓋に張つた短冊形の白紙に「開山淨阿上人自筆和讃」と記るされている（但し、これわ用紙筆蹟とも）に極めて新しいものである。和讃わ折本で始末の二冊。縦一六・一cm、横一三cm。表紙の左肩に、白地に紫の雲形の模様のある紙に「和讃始」「和讃末」とある。本文わ上質の斐紙に薄墨の野おかけ、一行に一句、一面に五行ずつ記るしてある。この和讃お金蓮寺の開山淨阿上人の筆と言ふのわ、そのように言い傳えられているだけで、その裏付になる資料わ何も傳つていない、とゆうことである。紙質や筆蹟から推測すると、大體、室町の初期頃のものか、或わ南北朝に遡るかもしれないと思われる。始卷わ、表紙裏わ白、第一面に上の如く目次があり、その裏から和讃お書き

・往生淨土・別願
・阿彌陀經・涅槃
・八相・弘願
・稱揚・末法
・滅罪

はじめ、九十八折お書き終り、裏表紙の裏にも書き、裏え廻つて三折半まで和讃お書き、次に「讃念佛事」と題して散文が一折半に書いてある。末卷わ、始卷と同じく表紙裏わ白。第一紙の表から裏えかけて下の如く目次。次に十四行偈。次に和讃お書いて、九十折お書き終えて裏表紙の裏にも書き、裏え廻つて第二十七折まで和讃お書き、次に「中讃」「後讃」「おどり念佛の事」お七折

半にわたつて書いてある。題笥も本文も、すべて同筆と見受けられる。所收の和讃お淨業和讃と對比すると次のごとくである。

・十四行偈・六道
・莊嚴淨土・迎接
・無上大利・太子
・無常・五増上緣
・光陰・極樂
・寶蓮・釋迦
・本願・光明
・恩徳



参照の便宜のために、順序数字をお加えておく。浄業和讃の方で\*印お附けたのわ、金蓮寺の「和讃」に無いものである。(金蓮寺本の末巻の目次と本文と比較すると「莊嚴淨土」と「迎接」が逆になっている。左にわ本文に依つて目次お記るした)

# 金蓮寺の「和讃」

## 浄業和讃

(始巻)

(上巻)

(作者)

(諷誦日)

(1) \* (極樂六時讃)

恵心僧都

(中巻)

(2) \* 來迎讃

恵心僧都

常課

(一) 往生淨土 → (4)

(3) 別願讃

(新) 一遍上人

廿九日

(二) 別願 → (3)

(4) 往生讃

(新) 他阿上人

廿七日

(三) 阿彌陀經 → (14)

(5) 弘願讃

(新) 三祖上人

十四日

(四) 涅槃 → (23)

(6) 稱揚讃

(新) 三祖上人

十三日

(五) 八相 → (22)

(7) 六道讃

(新) 三祖上人

十六日

(六) 弘願 → (5)

(8) 寶蓮讃

(新) 七祖上人

五日

(七) 稱揚 → (6)

(9) 莊嚴讃

(新) 七祖上人

十來日

(八) 末法 → (19)

(10) 光陰讃

(新) 七祖上人

十二日

(九) 滅罪 → (18)

(11) 大利讃

(新) 七祖上人

廿日

時宗の本作の和讃

(讃念佛事)

(12) \*二教讃 具云二尊教

(新) 上入

(13) \*拾要讃 前

(新) 十四祖上人

(14) 小經讃 本云阿彌陀經

(本) 廿十八日

(末卷)

(下卷)

(十四行偈)

(15) 恩徳讃 小

(本)

常課 廿九日出

(16) 恩徳讃 大

(本)

廿九日出

(17) 無常讃

(本)

廿五日

(18) 減罪讃

(本)

廿六日

(19) 末法讃

(本)

廿七日

(20) 釋迦讃

(本)

廿八日

(21) 五縁讃

(本)

晦日

(22) 八相讃

(本)

十四日

(23) 涅槃讃

(本)

十五日

(24) 拾要讃 後

(新)

十四祖上人

(25) 迎接讃

(本)

廿五日

(26) 極樂讃 本

(本)

廿六日

(27) 極樂讃 末

(本)

廿七日

(目) 釋 迦 → (16) (28) 光明讚 (本)

(目) 恩 德 → (20) (15) (29) 寶海讚 具云寶海梵士 (本)

(目) 光 明 → (28) (30) 心品讚 (本)

(中讚) (31) 本願讚 (本)

(後讚) (32) \*懺悔讚 (新)

(おとり念佛の事) (十四行偈) 古本雖存此讚與玄義分全同故今且略之而已

(踊念佛 附合喚聲儀等)

右の目次お對照しただけで、金蓮寺の和讚と淨業和讚とを密接な關係にあることが明に知られる。淨業和讚わ和讚名お「○○讚」と二字に統一しているが、(4)(9)(11)(12)(14)等、「具に(本)○○○○と云う」と四字の題お註しているものが、そのまま金蓮寺の和讚に見えるのわ注意せられる。尤も「五増上緣」が「五緣讚」になつてゐるのについてわ註が無いが、五増上緣お略して、五緣とやうのわ名數として一般のことであるからであらうか。しかし(目)「太子」が「寶海讚<sup>具云寶海梵士</sup>」となつてゐるのにわ飛躍が感ぜられ(寛海梵士わ寶海梵志と書くべきであらう) また

(目) 釋迦 → (16) 恩德讚 大

(目) 恩德 → (20) 釋迦讚、(15) 恩德讚 小

(目) 極樂 → (26) 極樂讚 本、(27) 極樂讚 末

のごとく大きく變化しているところを見ると、金蓮寺の和讚と淨業和讚とわ、直接の母子關係にあるのでわなく、もつと遠く離れてゐることが感ぜられる。

數年前、竹田實善氏わ「淨業和讃の成立」と題する論文<sup>(註)</sup>の中で、慶長四年1599十月に、遊行三十二世普光上人1543—1606が書寫した和讃<sup>藤澤の清淨光寺藏</sup>及び天明元年1781書寫<sup>(筆者)未詳</sup>の和讃<sup>愛知縣大濱の稱名寺藏</sup>を紹介せられた。いま氏の論文によつて和讃名お舉げよう(上の數字は前記金蓮寺の和讃及び淨業和讃に附したものである。慶長の寫本は、新作「上下二冊」本作「上中下三冊」と卷お分けて居り、天明の寫本お誦誦の日の順お考慮して次第している)

慶長の寫本

天明の寫本

(和讃新作上)

(一) (3)別願 元祖上人御作

(二) (4)往生淨土 第二祖上人御作

(三) (5)弘願 中上人御作

(四) (6)稱揚 同上

(五) (7)六道 同上

(和讃新作下)

(六) (8)寶蓮 二十日上人作

(七) (9)莊嚴淨土 同

(八) (10)光陰 同

(九) (11)無上大利 同

(十) (12)二尊教 十一世上人作

(13)拾要 一日 二十四日

(14)光陰 二日 十七日

(15)稱揚 三日 十八日

(16)弘願 四日 十九日

(17)寶蓮 五日

(18)減罪 六日 二十一日

(19)末法 七日 二十二日

(20)釋迦 八日 三十日

(21)別願 九日 二十三日

(22)無常 十日 二十五日

(23)二尊教 十一日 二十六日

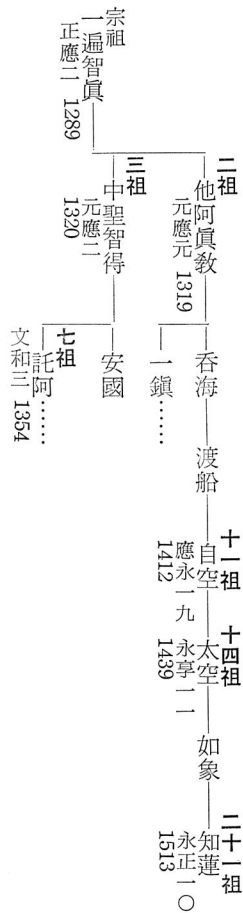
時宗の本作の和讃	(13) 拾要	十四世上人作
	(24) 後拾要	同
	(32) 懺悔	二十一世上人作
	(和讃本作卷上)	
	十四行偈	
	(20) 釋迦	
	(21) 五緣	
	(25) 迎攝	
	(18) 滅罪	
	(14) 阿彌陀經	
	(和讃本作卷中)	
	(17) 無常	
	(15?) 恩德	
	(16?) 恩德	
	(26?) 極樂	
	(27?) 極樂	
	(19) 末法	
	(4) 往生淨土	十二日 二十七日
	(9) 莊嚴淨土	十三日
	(21) 五緣	十四日
	(14) 彌陀經	十五日 二十八日
	(7) 六道	十六日
	(11) 無上大利	二十日
	(16?) 恩德	二十九日
	(22) 八相	二月十五日

## (和讃本作卷下)

- (四) 28) 光明
- (六) 29) 寶海梵士
- (四) 30) 心品
- (三) 31) 本願
- (五) 22) 八相
- (四) 23) 涅槃

先に記した淨業和讃の「五縁讃」わ慶長本において既に「五縁」になつて居り、「寶海梵士」も慶長本に見えるものであつた。さて金蓮寺の「和讃」と淨業和讃との目次お比較して知られる大きな差違の一つわ、源信僧都の六時讃及び來迎讃が金蓮寺の本に無いことである。そしてこれは慶長本にも天明本にも無いのである。竹田氏の調査によれば、慶長四年に「和讃」お書寫した普光上人が、元和七年 1621 に書寫した六時讃と來迎讃(合一冊)が現に清淨光寺に傳つているとゆう。しかもこの本と慶長の「和讃」とわ紙の大きさも製本のしかたも違つていて慶長の和讃わ一六・七cm×一九・五cmの横本で袋綴、六時讃及び來迎讃わ一二cm×九・六cmで折本になつてゐる。清淨光寺にわ二祖他阿上人筆と傳える六時讃もある由で、普光上人わ六時讃の存在お早くから知つていたに違ひないと思うが、慶長四年筆寫の新作本作の「和讃」とわ別にしてゐるのである。稱名寺にも他阿上人の筆とゆう六時讃の晨朝讃がある由であるが、天明書寫の本にも源信の和讃わ入つてゐない。このような事から考えると、源信僧都の六時讃及び來迎讃と時宗所傳の新作・本作の諸和讃とわ別々に取扱われて來たらしいことが知られる。従つて金蓮寺の「和讃」わ慶長の

和讃、天明の和讃の系列のもので、その古い形お傳えているものと考えられる（源信の六時讃・來迎讃お新作本作の和讃に併せて、一部の和讃集にしたのわ、淨業和讃が初であるのかと思われる）。第二の大きな差違わ、金蓮寺の和讃にわ淨業和讃所載の(12)二教讃、(13)拾要讃前、(24)拾要讃後、(32)懺悔讃の四編お缺いていることである。淨業和讃にわ(18)(24)二編の拾要讃わ十四祖上人撰とあるが、(12)二教讃、(32)懺悔讃わ作者名が記るされていない。竹田氏わ前記慶長書寫の和讃に二教讃わ十一世上人作、懺悔讃わ二十一世上人作とあること、清淨光寺の歷代靈薄によつて、十一世上人わ自空、二十一世上人わ知蓮であると記るしておられる。<sup>(註二)</sup>時宗の新作和讃の作者と傳えられる人わ、いずれも遊行上人である。その系譜と寂年わ次の如くである。（左方の年次は示寂の年）。



金蓮寺の「和讃」が、一遍、他阿、智得、託阿の作までお書いて、その後の自空、太空、知蓮の作お書いていないのわ、その筆寫年代が自空の時代よりも前であつたためであらう、と考えられる。

ここで淨阿上人とこの「和讃」との關係お一考しよう。淨阿わ上總の人、牧野太郎頼氏の子である。若くして剃髪し、諸國お行脚したが、時宗の二祖他阿眞教に會うてその門に入つた。次いで京都の祇陀林寺に入つたが、皇室の篤

い尊信お受け、祇陀林寺お金蓮寺と改めた。そして暦應四年1341に七十三歳で示寂した。<sup>(註三)</sup> 暦應わ南北朝に入つて十一年目で、一遍智眞の示寂した正應二年から五十二年後である。金蓮寺の「和讃」が所傳のごとく淨阿の筆であるならば、鎌倉末期またわ南北朝初頭のもの、ということになる。ところでこの「和讃」にわ七祖託阿の作つた(三)莊嚴淨土、(四)無上大利、(五)光陰、(六)寶蓮の四編の和讃が全部入っていることが注意せられる。託阿わ三祖智得に従い、暦應元年1338に時宗の法燈お繼ぎ、文和三年1364に七十歳で示寂した人である。<sup>(註四)</sup> すなわち託阿わ五十七歳で法燈お繼いだ、その時淨阿わ既に七十歳であつた。そしてそれから三年後に淨阿わ亡くなつたのである。託阿わその四編の和讃お何歳の時に作つたのかわ明かでないが、假に暦應元年二年までに作り、それが直に淨阿の手に入つたとするならば、淨阿筆の和讃集に編入せられる可能性が、ありえないわけでもない。然しこのような假定にわ時間的に危険が多い。金蓮寺の住職わ代々「淨阿彌陀佛」と號していたのであるから、二代目の淨阿、三代目の淨阿の書いたものが、初代淨阿の筆として傳えられる可能性も考えられる。自分わこの和讃の筆者が實際に誰であるかを決定すべき材料お有つていないので、ここでわ、自空大空よりも前の時代の人と見、室町の初期、或わこれお少しく遡る時代のものとして取り扱うことにしたい。

さて、金蓮寺の和讃わ、先にも記るしたように、その廿四篇の和讃わ、全部同じように一句一行、一面に五行ずつ記るし、調聲の句(大體四句目)には朱お以つて……の記號がつけてある。これわ淨業和讃の記號と比較して考えるのと初重、二重、三重お意味するようであるが、このような點から見ると、この廿四篇の和讃わすべて諷誦せられたものと考えられる。ところで淨業和讃わ、凡例に「中古ヨリ例時ニ行ズルニ用不アリ(申略)例時ニ讃ズル文ニ具略アリ。一行ニ一句ト二句トヲ以テコレヲ判ツ。龜細異トイヘトモ同讀連續ノ文ナリ」とあり、各篇とも一行に二句ずつ



記した部分があるが、(23)涅槃讃、(24)拾要讃後、(25)迎接讃、(26)極樂讃本、(27)極樂讃末、(28)光明讃、(29)寶海讃、(30)心品讃、(31)本願讃、(32)懺悔讃の十篇わ、全部が一行に二句ずつ記してある。即ちこの十篇わ全く諷誦しないことになっているのである。竹田氏が紹介せられた天明の寫本にわ、右の十篇わ悉く除かれているから、これらお諷誦しないようになつたのわ天明以前からであろうか天明の本にわ、右の十篇の外に極樂六時讃、來迎讃、恩德讃(小)の三篇、計十三篇が除かれている。六時讃と來迎讃わ特放であつた。時宗の慶長四年の本わ、目次だけでわ明でない點もあるが、淨業和讃所載のものの中、六時讃と來迎讃お除方の教をうたいたい。慶長四年の本わ、目次だけでわ明でない點もあるが、淨業和讃所載のものの中、六時讃と來迎讃お除く三十篇が悉く記るされているようである。この本わ、新作と本作とで卷お分け、丁度三十篇お記るしているが、淨業和讃の凡例に「古來、本新作卷ヲ分チ、又三十首ヲ三十日ニ配リテ讃シケルトナン」とあるのわ、慶長本の系統のものお指すのかと考えられる。この推測に大過が無いならば、十篇の和讃お諷誦しなくなつたのわ江戸時代に入つてからであろうかと考えられる。日常に懇誦する和讃の中で一部分お省略するのわ、いつ頃からであるか、とゆうことも併せて考察しなけれ  
ばならないが、この點についてわ、未だ資料が揃わないのでこれについての考察わ他日に譲ることとする。ともかく、十篇の和讃、ことに八篇の本作和讃が全然諷誦せられなくなつた、とゆうことも重要な問題であると思われるが、何故に諷誦せられなくなつたのであろうか。

さて本稿に於いてわ、紙面の關係から金蓮寺の「和讃」所收の二十四編の中、淨業和讃に「本作」と標している左記十五篇について、淨業和讃と比較して、本作といわれる時宗の古和讃の性格おできるだけ明にしてみたいと思う。

(三)阿彌陀經、(四)涅槃、(五)八相、(六)末法、(七)減罪、(八)迎接、(九)心品、(十)無常、(十一)太子、(十二)五増上緣、(十三)極樂、(十四)本願、(十五)釋迦、(十六)恩德、(十七)光明。

右の「本作」十五篇の中、淨業和讃所收のものと本文が甚しく違つているのわ、

(一)迎接、(二)無常、(三)五増上緣、(四)極樂、(五)釋迦、(六)恩德

等である。これに對して、(四)涅槃、(五)八相、(六)太子、(七)本願等わ差違が少く、他わ兩者の中間にある。先ず差違の甚しいものについて記そう。

## 二 (二)迎接、(五)無常、(六)五増上縁、(七)極樂、(八)釋迦、(九)恩徳

金蓮寺の和讃わ、平假名お用い、淨業和讃わ片假名お用いてるので、今もそれに従う。金蓮寺本お本文にし、淨業和讃との差わ、右側及び下段に書き入れることにする。なお先にも記するように金蓮寺の和讃わ、句頭に朱で……の印がある。淨業和讃に比べてみると、これは初重、二重、三重、(頭)とあるものに相當し、調聲(音頭)である。……は初重、二重、三重に相當する。但し一句の全部が調聲になるのは極めて少く、大部分は初の一語または一文節だけである。なお……等の上に加えた(1)(2)等の數字は取扱の便宜上、いま自分が加えたものである。

(例。「臨命終の時トキいたり 彌陀ミダの御名ミナを唱となれは」わ

「臨命終の時トキいたり 彌陀の御名を唱れは」——金蓮寺本

「臨命終トキノトキイタリ 彌陀ミダノ御名ミナヲトナフレバ」——淨業和讃

の意である。)

なお、下の備考欄の空也和讃に③④等の數字お添えたのは、別稿「空也和讃について」において、民間に流布している空也和讃(二百七十六句)お、整理の便宜上、四句お單位にして①②……③④と番號お附したことがある。その番號である。

## (二) 迎接 (例迎接讃)

(1)・臨命終の時トキいたり

彌陀ミダの御名ミナを唱となれは

ほのかに音楽しらへつつ

妙タなる哥カ詠エイ讀ドク嘆ナゲす

念佛假名法語所載「來迎和讃」に「臨命終の時トキいたり……きけば西方界のそら、伎樂歌詠ほのかなり」とある。

(2)・遙<sup>ハルカ</sup>にみれば西方の

彌陀如來能仕の衆<sup>主</sup>

空<sup>ソラ</sup>には紫雲たなひきて

金色相好あらたなり

(3)・中<sup>ナカ</sup>にも白毫まとかにて

色々<sup>ササカ</sup>ひかりかゝやきて

秋<sup>アキ</sup>の月<sup>ツキ</sup>にことならず

行者の室<sup>デラ</sup>をそ照しける

(4)・觀音勢至諸薩埵

無數の賢聖諸天衆

ひかりの中に充滿<sup>ミチミツ</sup>り

くもの間<sup>アヒダミ</sup>に見え給ふ

(5)・紫雲漸<sup>ヤウヤ</sup>く近付<sup>チカヅキ</sup>て

既に斜<sup>スデニナジメ</sup>におり居<sup>ホ</sup>てそ

異香<sup>ニホヒツツ</sup>かつく匂<sup>ニホヒツツ</sup>ます

こゑく我<sup>ゴエワレ</sup>をほめ給<sup>タマ</sup>ふ

(6)・空<sup>ソラ</sup>には妙華ふりくたり

伎樂哥詠<sup>歌</sup>こゑすみて

地には聖衆つらなりて

栴檀沈香にはひます

(7)・菩薩聖衆この時に

漸く此相見聞に

雲の中より顯現し

悲熙の涙とまらず

(8)・彌陀如來諸聖衆

觀音臺<sup>ウツナ</sup>をよせ給<sup>タマ</sup>ひ

行者の前に顯現し

勢至頭<sup>カウベ</sup>を撫<sup>ナデ</sup>たまふ

時宗の本作の和讃

四句、空也和讃④に見える。但し第三句「彌陀如來その化主」とある。

極樂六時讃の辰朝讃に「觀音勢至諸薩埵無數の賢聖天人衆來迎ノナカニミチミテリ」とある。ヒカリノ讃にも「觀音勢至諸薩埵光の中にてこみてり」をの威徳あらはれてこゑく行者をほめ給ふ」とある。四句、空也和讃⑤に見える。但し第二句「異香暫くにはひけり」第三句「おり居ては」とある。

四句、淨業和讃の迎接讃にわなない。第四句「空也和讃の④に見える。但し第二句「影現し」三句「暫く彼相見えきく」に、四句「悲喜の涙」とある。

二句、空也和讃④に見える。

(9)・つゝに大悲觀世音

金蓮臺に座せしめ

大勢至も手を授け

おなしく引接たれ玉ふ

(10)・時に聖衆ことくく

威儀を忘て歡喜せり

ほとけも咲を含みてそ

漸かへり給ひける

(11)・則佛後にしたかひて

此等の大會もろ共に

輪廻の里を別つゝ

安養淨土に往生す

(12)・永離身心惱

内外の受樂隙もなし

大乘善根界

誰か機嫌の名をきかん

(13)・色みな眞の色にして

花葉も塵に穢されす

聞聲さながら法なれば

衆生さとりをひらく也

(14)・色を見こゑを聞も皆

見佛聞法縁をなす

香をかき味なむる事

發心修行のたより也

(15)・臨終正念なるゆへに

音樂異香來現し

臨終の正念なる故に

彌陀諸聖來迎す

(16)・臨終の正念なる故に

無生を悟て華に坐し

臨終の正念なる故に

彈指の間に往生す

六時讃の晨朝讃に「ツヒニ引接シタマヒテ、金蓮台ニ坐セシメ」とある。

四句、空也和讃⑩に見える。但し三句「佛も笑ひを含めてぞ」

六時讃の晨朝讃に「スナハチ佛後ニシタガヒテ安養淨土ニ往生セム」とある。

八句、空也和讃の⑩⑪に見える。但し第一句「臨終正念……」二句「音樂異香」

(17)・蓮花の始て開けたる

聖衆の來迎せし時に

心のうちを想像れ  
百千萬倍勝れたり

(18)・彼は無常の快樂なり

これは不退の果報也

遂に三塗<sup>(三途)</sup>を逸れす  
必ず菩提を證すへし

(19)・極樂世界の莊嚴は

四十八願土をかさり

廣大寛平衆寶也  
諸佛の國土に超過せり

へ四十八願莊嚴土

華池寶閣易往無人

へ易往の淨土なかりせは

我等いつくをねかはまし

この十六句、迎接讃にわ無い。

この四句、金蓮寺の「和讃」の極樂にも見える、但し第二句「廣大寛平殊寶也」とある。

三十二相具足シテ

莊嚴端正殊妙ナリ

六通三明サトリエテ

ココロノゴトク自在ナリ

サキニ往生<sup>(ム)</sup>セシヒトハ

神通自在ノ身トナリテ

苦海ニカヘリキタリツツ

イソギテワレラヨムカフベシ

八句、迎接讃に見えない。「三十二相」以下四句は念佛假名法語所載の來迎和讃に見える。

金蓮寺本「迎接」わ八十句のものであるが、そのうち(7)の四句と(18)(19)の十六句、計二十句わ淨業和讃本にわなく淨業和讃本わ金蓮寺本にない八句お末尾に有つてゐるので、合計二十八句の出入があるが、共通する五十八句の順序わ一致してゐる。そしてこの五十八句の中でわ用語わほとんど一致してゐる——淨業和讃わ全卷お通じて、訓讀の漢字お用いないように努力してゐるので、この和讃でも訓讀の漢字が假名になつてゐる所わ多い。また金蓮寺本にわ(2)「能化の衆」(7)「悲熙の涙」など誤字が少々あるが——

さて「迎接(讃)」わ、讀みかえしてみると、内容にまとまりの無いことが感ぜられる。先ず最初の四句お見ると、臨命終時に彌陀の御名お唱えるのわ、願生行者であるが、音楽おしらべ歌詠讃嘆するのわ來迎の聖衆であるはずである。その來迎の聖衆が「ほのかに」音楽おしらべるのであろうか。そうでわなくて、遠方で聖衆のしらべる音楽が、行者の耳に「ほのかに」聞えてくるのであるはずである。したがつて「ほのほかに音楽しらべつゝ」という和讃の本文でわ意味が通じないように思われる。次に阿彌陀佛の金色の姿が現われ、白毫わ行者の室お照らす、觀音、勢至、無數の聖衆が、(4)「くもの間に見え給ふ」、紫雲わ既に近付いて、聖衆わ(5)「こゑく」に我お賞讃せられ、(6)地上につらなつて居られる、と云つて、次に(7)「菩薩聖衆この時に、雲の中より顯現し」と言つてわ、話が前後し、かつ重複する。(7)の四句わ淨業和讃の方でわ除かれてゐるが、意味の續き方から見れば、この四句わ無い方がよい。このようなことお一々書いてゐてわ際限がないが、(17)「蓮華の始て開けたる」時の喜びわ「聖衆の來迎せし時(の喜び)に百千萬倍勝れたり」とある。これわ來迎迎接お讃嘆する和讃としてわ適當でわないであらう。(18)「彼は無常の快樂なり」以下も、それ以前の文とわ關係のないもので、意味も續かない(17)以下わ淨業和讃にわない文であるが、淨業和讃の方の「三十二相……」の文に置きかえてみて、やはり意味わ續かない。(15)(16)の八句わ臨終正念の功德お述べた



(3)・稱念すれは罪消<sup>シ</sup>て 臨終に聖衆來迎<sup>シ</sup>す

業縛罪苦もさへされは 此ゆへ増上縁といふ

(4)・彌陀の名號唱<sup>ナ</sup>れは 十惡五逆も皆消<sup>ナ</sup>ぬ

しるへし超世の大願<sup>悲</sup>は 他力懺悔のちからなり

(5)・名號智火の力にて 煩惱薪<sup>タネ</sup>みなつきぬ

佛智の功能<sup>ツヨ</sup>こはければ 滅罪増上縁といふ

(6)・名號執持する人は 觀音勢至を勝友とす

聖衆の親近<sup>ナ</sup>たへされは 護念増上縁といふ

(7)・稱念すれは來入し ほとけも聖衆も見え玉ふ

こゑに應して現すれは 見佛増上縁といふ

(8)・臨終に聖衆來迎し 須臾<sup>カ</sup>に彼土に往生す

名號不思議の力にて 最後の引接たれ給ふ

へ大乘廣智の劫<sup>功</sup>なれは 攝生増上縁といふ

(9)・聖衆の華臺<sup>坐</sup>に座<sup>イルコト</sup>する時 則<sup>スナハチ</sup>無生を證得す

不退の位<sup>イルコト</sup>に入事は 無等無輪<sup>倫</sup>の悟り也



へ最上證智の益なれば

證生増上縁といふ

(10)・臨終に彌陀を念すれば

本願力によりてこそ

慈光來りて身を照す

寶の臺に入にけれ

(11)・娑婆を長く別つゝ

瑠璃の地には寶樹あり

始て彼土の相をみる

光に彰もかかやけり

(12)・池のほとりの栴檀樹

枝葉花菓皆共に

行々葉々あひ繼り

七寶を以て合成す

(13)・七重寶樹つらなりて

八功德水きよくして

常樂我淨の風涼し

苦空無我の波となふ

(14)・樹下に天人聖衆あり

池のほとりの衆鳥は

ひかり花に映しつゝ

こゑを波にそあはせたる

(15)・寶樹の本には悉く

宮殿の中には皆ながら

諸佛の淨土顯現し

彌陀の三尊見え給ふ

時宗の本作の和讃

西方極樂世界ハ

大乘善根界ナレバ

無苦無惱ノトコロニテ

ナガク生死ヲハナレタリ

四句、「五縁」にわなない。淨業和讃の

五縁讀わこの四句で終る。

二十四句、五縁讀にわ無い。

この四句、淨業和讃の光明讀に見える。但し第三句「本願力ニノリテコソ」

四句、淨業和讃の極樂讀（本）に見える。

四句、淨業和讃の極樂讀（本）に見える。

四句、空也和讃の④、金蓮寺本の極樂讀（淨業和讃の極樂讀（本）に見え。但し「一句空也和讃にと寶樹のした」極樂讀（本）に「寶樹ノモト」の一句空也和讃にわ「顯現す」とある。

「五増上縁」と「五縁讃」とわ第四十句までわ一致している。この部分わ、初に序説的に觀經疏にゆう親縁・近縁・増上縁の三縁について述べ、次に觀念法門の滅罪増上縁・護念増上縁・見佛増上縁・攝生増上縁・證生増上縁の五種増上縁（略して五増上縁・五縁とゆう）について、その一々について説明的に述べたものである。第四十一句から後わ、兩者わ大きく違つてゐる。五増上縁の「臨終に彌陀を念ずれば」以下二十四句わ、内容的に五種増上縁と直接に關係がなく、和讃の文藝的な感じも違い、二十四句の中、十六句は他の和讃と一致する（残りの八句も他の和讃に類傾の句がありそうに思われるが、まだ見出すことができない）こと、「宮殿の中には皆ながら、彌陀の三尊見え給ふ」と云うだけでわ「五増上縁」が結ばれてゐるとわ思えないこと等お思い合わせると、この部分わ他の和讃の文が混入したのであらうと思われる。五縁讃の方の「西方極樂世界へ」等の四句も、この和讃の原型お傳えるものか否か、證明すべき資料が無いが、五増上縁の一々について説き終つた後に、この程度の文が一章あるのわ自然な形であるように思われる。それわともかくとして、終りの方がこのように差違が甚しいのに、初の四十句が一致してゐるのわ不思議なようにも思われる。これわ三縁、五増上縁わ名數として文字も順序も決つてゐるので、和讃の原型が崩れなかつたのであらう。

㊦ 極樂 (26) 極樂讃本 (27) 極樂讃末

この和讃は、差違がことに甚しいので、淨業和讃の極樂讃（本）同（末）の全文お下段に掲げて淨業和讃の方にも(一)(二)等の番號お附けることにする。但し淨業和讃の方は、平生諷誦しない和讃であるため頭(一)の記號はないが、金蓮寺本に準じて假りに章お分けた。

(1) 既に淨土に生れたる

無爲無漏のたのしみは

輪主釋王梵王の

たとへとする事得へからず

極樂讚(本)

(一) スデニ淨土ニウマレタル

無爲無漏ノタノシミハ

輪主釋王梵王モ

タトヘトスルコトウベカラズ

(2) 昔娑婆にて聞しにも

いま見る所は超過せり

いまたみさるを見るのみか いまたきかざる法をきく

〔目には妙なる色をみる 耳には解脱の聲をきく〕

(二) ムカシ娑婆ニテキキシニモ

イマミルトコロハ超過セリ

イマダミザルヨミルノミカ

イマダキカザルノリヨキク

(3) 其土の衆生一人も

衆苦ある事更になし

たゞもろくの樂をうく 此ゆへ極樂國といふ

四句、極樂讚にわ無い。

〔阿彌陀經〕(小經讚)に見える。

(4) 然に彼土の衆生は

見聞こゝろにまかせたり

眼にはほとけを瞻仰し みゝに微妙の法をきく

四句(三二)に見える。

(5) 所は不退のところにて

三途八難恐なく

壽は無量の命にて 生老病死の愁なし

四句(四〇)に見える。

(6) 泥洹無爲の國なれば

ところに災もなかりけり

聖衆を伴侶とする故に 退緣退境さらになし

四句(三四)に見える。

(7)・歴劫以來にいまた見す  
地上虚空に充滿て  
西方淨土の寶莊嚴  
珠羅寶網圍繞せり

(三) 歴劫已來ニイマダミズ  
西方淨土ノ寶莊嚴  
地上虚空ニミチミチテ  
珠羅寶網カサナレリ

(四) 寶樹ノモトニハコトゴトク  
諸佛ノ淨土顯現シ  
宮殿ノナカニハミナナガラ  
彌陀ノ三尊ミエタマフ

(四) に見える。

(五) 七重寶樹ツラナリテ  
常樂我常ノカゼスズシ  
八功德水キヨクシテ  
苦空無我ノナミトナフ

以下、十二句、極樂にわ無い。  
四句、五増上縁に見える。

(六) 樓殿林池照曜シ  
表裏タガヒニカガヤケリ  
鳧雁鷺ムラガリテ  
微妙ノ法門サヘヅレリ

第四句、金蓮寺本波罪に見える。

(七) ノリヲトナフル衆鳥ハ  
イケノホトリニ逍遙シ  
ハナヲチラセル諸天ハ  
ソラノナカニミチミチリ

四句、金蓮寺本波罪に見える。

(八) アルヒハ宮殿樓閣ニ  
ノボリテ他方界ヨミル  
アルヒハ人天聖衆ニ  
マジリテ伎樂歌詠セリ

(八) に見える。

(8)・盡虚空の莊嚴は

轉妙法輪の音楽は

(9)・極樂世界の莊嚴は

四十八願土をかさり

(10)・八方上下無央數の

極樂世界の莊嚴は

(11)・教主世尊の梵音聲

觀音勢至の妙軟語

(12)・百千萬樹の寶蓮華

微風漸く吹過て

(13)・寶樹の本には悉く

宮殿の中には皆なから

まなこ雲路にまかひつゝ

きゝ寶刹にみちみてり

廣大寛平殊寶也

諸佛の淨土に超過せり

諸佛國土の其中に

最尊第一ならひなし

きけともく飽期なし

ふかく肝にそ銘しける

池の面にさきみたれ

ひかりも匂ひも亂轉す

諸佛の淨土顯現し

彌陀の三尊見え給ふ

目ニハタヘナルイロヲミル  
耳ニハ解脫ノコエヲキク

(九)百寶千寶具足セル  
七重寶樹ノモトゴトニ  
化佛菩薩マシマシテ  
不退ノ法文トキタマフ

(一〇)八方上下無央數ノ  
諸佛國土ノソノナカニ  
極樂世界ノ莊嚴ハ  
最尊第一ナラビナシ

(二)に見える。

四句「極樂」にわ無い空也和讃⑤  
⑤に見える。但し第四句「微妙の  
法門」

(二三)に見える。第二句「マカ(ヨ)  
と」

四句、極樂にわ無い。迎接に見え  
る。第二句「衆寶也」

四句、(四一)に見える。第三句  
「妙軟言」

四句、(二六)に見える。空也和讃  
⑤⑥にも見える。

(四)に見える。空也和讃⑤⑥、五  
増上縁にも見える。

(14)・大寶宮殿に詣ては

玉樹樓にのぼりては

(15)・あるひは宮殿樓閣に

或は天人聖衆に

ほとけの説法聴聞し

はるかに他方界を見ん

のほりて他界をみる

ましりて伎樂哥詠せり

(二)シカルニ彌陀ノ淨土ハ

快樂不退ノトコロニテ

壽命モ無量ニナガケレバ

タノシビツクルコトゾナキ

(三)ワレラモカノ土ニウマレナバ

コレラノ妙果ニホコルベシ

コレラノ妙果ヲエンコトハ

シルベシ念佛ノチカラナリ

(四)出離生死ノカタキコト

オモヒモシラヌコロニテ

本願易往ノ不思議ヲモ

オモフホドニハヨロコバズ

(五)ハヤク萬事ヲナゲステテ

一心ニ彌陀ヲ念ズベシ

悲願サダメテフカケレバ

引接ナニヲカウタガハム

(六)一日七日ツトムレバ

ウテナニノリテ娑婆ヲイヅ

以下八句、極樂にわ無い。

四句、淨業和讃の別願讃に見える。

四句、極樂六時讃の日中讃に見える。第二句「ミム」第四句「歌詠セム」

以下二十八句「極樂」に無い。

四句、念佛假名法語の來迎和讃に見える。

空也和讃、金蓮寺本「無常」にも見える。

ウレシキノリニモアヘルカナ  
無爲ノ法性證シテム

㊦ 誓到彌陀安養界

還來穢國度人天

願我慈悲無際限

長時長劫報慈恩

㊧ 十方三世ノ諸佛モ

一切ノ諸菩薩モ

八萬藏ノ聖教モ

阿彌陀ノ三字ニヲサマレリ

極樂讚(末)

㊨ 極樂世界ニユキヌレバ

ナガク苦海ヲコエスギテ

輪廻ノフルサトヘダタリテ

歡喜ノコロイクバクゾ

㊩ 大寶宮殿ニマウデツツ

彌陀ノ威光ヲ禮スレバ

金蓮臺座ノウヘニシテ

不退ノ法忍トキタマフ

㊪ 左右フタツノ寶座ニハ

觀音勢至マシマサル

ホトケノ如被ニアラズバ

コノ地ヲフムモノアリガタシ

第四句、空也和讃㊦に見える。

以下二十句「極樂」に無い。

四句、極樂六時讃中夜讃に見え  
る。第二句「マシマサル」

(二) ハジメテコノ會ヲ見キクニ

歡喜ノナミダトドマラズ

解脫ノタモトヨウルホシテ

無始ノ罪垢モススガレヌ

(三) ムカシハ無常苦空ヲ

ワレモヒトモウレヘキ

イマハ常樂我淨ヲ

チカクモトホクモウケニケリ

(四) 盡虛空界ノ莊嚴ハ

マナコ雲路ニマガ(ヨ)ヒツツ

轉妙法輪ノ音聲ハ

キキ寶刹ニミチミテリ

(五) イケニハ衆鳥ムラガリテ

微妙ノ法文サヘヅレリ

ソラニハ散華ノ天ミチテ

教主ヲ供養シタテマツル

(六) イケノホトリノ栴檀樹

行行葉葉アヒツゲリ

枝葉華菓ミナトモニ

七寶ヲモテ合成ス

(七) 百千萬種ノ寶蓮花

イケノオモテニサキミダレ

微風ヤウヤクフキスギテ

ヒカリモノニホヒモ亂轉ス

四句、極樂六時讀の日中讀に見える。  
第四句「ウケタリ」(ウケタリキ)

(8) に見える。第二句「まかひつ  
ム」

以下八句「極樂」に無い。四句、  
金蓮寺本波罪に見える。

四句、五増上縁に見える。

(四) に見える。



以下二十句「極樂」に無い。

- (七)アルヒハ樓ノウヘニシテ  
十方ヲノゾムモノモアリ  
アルヒハ宮殿ニ乗ジツツ  
虚空ニ坐スルヒトモアリ
- (八)空殿番番オホクシテ  
瑠璃ノトボソニハナヒラケ  
樓閣重重カサナリテ  
瓔珞帳ニツユヲタル
- (九)空殿ヲユケバ空殿アリ  
林池ヲユケバ林池アリ  
カクノゴトクヘメグルニ  
サマザマ微妙ノトコロアリ
- (一〇)說法衆會ノニハモアリ  
入定坐禪ノマドモアリ  
伎樂歌詠ノウテナアリ  
神通遊戲ノミギリアリ
- (一一)八功德池ノ蓮華ニハ  
往生人コソヤドルナレ  
オノオノ半座ニトドマリテ  
閻浮ノトモヲゾマツトキク
- (一二)シカルニカノ土ノ衆生ハ  
見聞ココロニマカセタリ  
マナコニホトケヲ瞻仰シ  
耳ニ微妙ノノリヲキク

(4)に見える。

(三)得果涅槃常住世

壽命延長難可量

千劫萬劫恒沙劫

兆載永劫亦無央

(四)泥洹無爲ノクニナレバ

トコロニ災モナカリケリ

聖衆ヲ伴侶トスルユエニ

退緣退境サラニナシ

(五)彌陀如來ニ奉仕シテ

不退ノクラキヲ證得シ

ホトケノ加被ヲカウフリテ

有緣ノ衆生ヲミチビカム

(六)阿彌陀佛ヲ念ズレバ

自行自然ニ増進シ

有緣ノ衆生ヲミチビケバ

利他速疾ニ圓滿ス

(七)曠劫來流轉

解脫ノコロモヲキザリシニ

速證無生身

瓔珞細嚔ミニマトフ

(八)ウテナニ忍辱ノコロモシキ

帳ニ解脫ノカザリアリ

寶座寶衣コトゴトク

莊嚴七寶ヲモテナセリ

四句「極樂」に無い。

(6)に見える。

以下二十句「極樂」に無い。

(同) 淨土十方ニオホケレド

罪人ウマルルコトカタシ

ホトケハ三世ニマシマセド

カカル悲願ハイマダナシ

(四) トコロハ不退ノトコロニテ

三途ハ難オソレナシ

イノチハ無量ノイノチニテ

生老病死ノウレヒナシ

(四) 教主世尊ノ梵音聲

キケドモキケドモアク期ナク

觀音勢至ノ妙輦言

フカクキモノゾ銘ジケル

(五) に見える。

(四) に見える。第三句「妙輦語」

金蓮寺本「極樂」わ、全六二句の中、極樂讚本と共通のもの二二句、同末と共通のもの二四句、不共通のもの一六句である。淨業和讃の極樂讚本わ、全七〇句のうち、「極樂」と共通のもの二六句、同末わ、全九六句のうち「極樂」と共通のもの二四句である。この數字を見るだけでも、この三篇の和讃が密接な關係にあることわ要易に分るが然し「極樂」が極樂讚本同末の母胎であるとも言にくいようである。先ず「極樂」について見ると、「既に淨土に生れたる、無爲無漏のたのしみは……」とゆう書き出しわ、いかにも唐突であつて、一篇の和讃の冒頭の文としてふさわしくない。また「既に淨土に生れたる、無爲無漏のたのしみ……」とゆうのわ「既に淨土に生れたる者(人)の、無爲無漏のたのしみ……」の意であらうと思われるが、言葉が足りないように思われる。終りの「あるひは宮殿樓閣に、のぼりて他方界をみる、或は天人聖衆に、まじりて伎樂哥詠せり」とゆう文わ、一篇の和讃の結尾としての

意味お有つていない。これわ、なおこの後に文がある筈であるのが、うち切られた感じである。しかもこの四句わ極樂六時讃と一致するから、これは六時讃の文がこえ混入したのでわないかと思われる。「極樂」わ六十二句から成つてゐるが、その内容わ思想的統一に缺けてゐる。例えば(3)(4)「其土の衆生一人も、衆苦ある事更になし、ただもろもろの樂をうく、此ゆへ極樂國といふ。然に彼土の衆生は、見聞ここにまかせたり……」とあるが、「然に」とゆう逆接の接續詞わ何處につづいてゐるのであるうか、續くべき語が無い。(4)「眼にはほとけを瞻仰し、みゝに微妙の法をきく」わ、(2)「目には妙なる色を見る、耳には解脱の聲をきく」と重複してゐるようである。(3)「其上の衆生一人も……此ゆへ極樂國といふ」の四句わ、この和讃の前後の文とわ少しく調子が違うように思われるが、この文わ「阿彌陀經」(小經讃)の中にも見えるものである。ところで「阿彌陀經」わ「知べし極樂世界には、これらの功德成就せり」お四回もくり返えて居て、これがこの和讃の重要なリフラインになつてゐるが、「極樂」でわただ一度用いられてゐるだけであり、前後と調子が合わない。従つてこの語わ、もとわ「阿彌陀經」の文であつたのが混入したのであるうと思われる。また(9)「極樂世界の莊嚴は」以下四句わ「迎接」にも見え、(12)「百千萬樹の寶蓮華」以下四句、(13)「寶樹の本には悉く」以下四句わ「空也和讃」にも見え、(14)「大寶宮殿に詣ては」以下四句わ淨業和讃の別願讃にも見える——但し「一遍聖繪」所載の和讃にわ、この四句わ無いから、これわ一遍の作でわない——即ち「極樂」の六十二句の中、他の和讃と一致する句が、いま氣付いただけでも廿四句にも及んでゐる。このようなことお考え合わせると、この「極樂」わ既に原形が崩れてしまつたのか、或わ初から原形とゆう程のものもなく、人が、いろいろの和讃の極樂に關する部分お便宜になぎ合わせて、いつとわなく一篇の和讃の如き形になつたのか、そのいずれかであるうと思われる。

淨業和讃の極樂讃本、同末もまたこれと相似たものである。極樂讃本の「極樂」と共通しない四十四句の中、二十五句わ他の和讃に見えるものであつて、他の和讃との混交の感が一層強い。そのうゑ、前半わ大體(一)「ムカシ娑婆ニテキキシニモ、イマミルトコロハ超過セリ……」等、既に往生した人の見聞するかたちであるのに、後半わ(二)「ワレラモカノ土ニウマレナバ、コレラノ妙果ニホコルベシ……」、(三)「ハヤク萬事ヲナゲステテ、一心ニ彌陀ヲ念ズベシ……」等、いまだ往生しない人の立場で述べていて、趣旨が一貫して居らず、最後の「八萬藏ノ聖教モ、阿彌陀ノ三字ニヲサマレリ」わ空也和讃の「釋迦一代の諸教は、阿彌陀の三字に納れり」と關係があるようであり、またこの文わ一篇の和讃の末尾の語としてわ、ふさわしくないように思われる。極樂讃末わ、往生人が極樂の有様お見聞するかたちになつていて、極樂讃本に見られるような内容上の大きな不統一わないけれども、部分的には意味の通じ難いところもあり、他の古和讃が混入したと認められる所も少くわなく、一篇の和讃としての有機的な組織わ備えていない。「極樂讃本」「極樂讃末」というけれども、この二篇わ内容的に本末の關係にあるものでわなく、極樂に關する和讃が二篇あるとゆうだけである。思うに、「極樂」も「極樂讃本」も「極樂讃末」も、ともに或る個人によつて創作せられたものでわなくて、多くの人が種々の和讃お誦誦しているうちに、極樂に關する部分が、いつとわなくつながり合はれて、このような和讃になつたのであらう、と考えられる。

次に(三)釋迦(恩德讃大)、(四)恩德(釋迦讃、恩德讃小)わ相互に關係があるから一括して考察することにする。

(三) 釋迦

(1)・恩徳廣大釋迦尊

難化難度の衆生の

平等一子の願なくは

いかてか生死を離るへき

(2)・釋迦の教のなかりせば

生死の夢のうちにして

久遠劫をは隔つとも

一念覺悟いかゝせむ

恩徳讃大

(一) 恩徳廣大釋迦尊

平等一子ノ願ナクバ

難化難度ノ衆生ノ

イカデカ生死ヲハナルベキ

(二) 釋迦ノヲシヘノナカリセバ

久遠劫ヲヘダツトモ

生死ノイメノウチニシテ

一念覺悟イカガセム

(三) 釋尊慈父ノススメタル

西方淨土ノ教行ハ

出離ノミチニマヨヒタル

ワレラガ目足トコソキケ

(4) に見える

(3)・釋迦は慈父の如くして

彌陀は悲母におなしくて

穢土の生死を濟度せり

淨利菩提に引導す

(四) 釋迦ハ慈父ノゴトクシテ

穢土ノ生死ヲ濟度セリ(ム)

彌陀ハ悲母ニオナジクテ

淨利菩提ニ引導ス

(4)・釋尊慈父の勸たる

出離の道にまとひたる

西方淨土の教行も

我等が目足とこそぎけ

(三) に見える

(5)・萬行其數おほけれと

本師釋迦の説のみか

すみやかなるは淨土門

十方の諸佛皆證す

(五) 萬行ソノカズオホケレド

スミヤカナルハ淨土門

本師釋迦ノ説ノミカ

十方ノ諸佛ミナ證ス

(6) 五濁惡世の衆生の

信ぜすいかゝ六方の

釋迦の遺法彌陀の願

諸佛の舌相破るべき

(7) ほとけ阿難に付屬して

たもてといへるは彌陀佛の

この法必すたもつへし

御名を持って忘れされ

へ壽おはらん其期まで

それそ佛恩報すへき

堅固に持て忘れされ

(六) 五濁惡世ノ衆生ノ

釋迦ノ遺教彌陀ノ願

信ぜズイカガ六方ノ

(七) ホトケ阿難ニ附屬シテ

コノ法カナラズタモツベシ

タモツトイヘルハ彌陀佛ノ

御名ヲタモチテワスレザレ

今日アヘル要法ヲ

イノチヲハラム其期マデ

(八) 貪瞋フタツノナガレヲバ

ナミヲシノギテワタルベシ

中路ノ白道セマケレド(バ)

オクリムカフル指南(シルベ)

(九) 釋迦ハコノ方ヨリ發遣シ

彌陀ハ(スナハチ)彼國ヨリ來

迎ス

カシコニヨバヒココニヤル

(一〇) 自信教人信

釋迦ノ大恩山タカク

難中轉更難

彌陀ノ悲願ハウミフカシ

四句、空也和讃⑥に見える。第三句「たもつ」

四句、空也和讃⑥に見える。第一句「今にちあへり要道に」第二句「命終その期に至る迄」第四句「これぞ……べし」

四句、金蓮寺本釋迦に無い。

四句、法然上人行狀畫圖三十二に見える。但し散文。

第二句、第四句、空也和讃⑥に見える。金澤文庫本觀音講和讃にも見える。

(10)・出離生死の要道を

きくにいよく悲しきは

大慈釋尊廣大の

恩徳いかてか報すへき

(二) 出離生死ノ要道ヲ

キクニイヨイヨカナシキハ

大師釋尊廣大ノ

恩徳イカデカ報ズベキ

(11)・諸佛の大悲は一にて

方便化門かはらねと

釋迦は無勝の土をすてゝ

閻浮に八相示現す

(三) 諸佛ノ大悲ハヒトツニテ

方便化門カハラネト

釋迦ハ無勝ノ土ヲステテ

閻浮ニ八相示現ス

(12)・歸命頂禮釋迦尊

五濁惡世の能化の主

大慈我等を捨すして

三塗のくるしみ抜給へ

(四) 歸命頂禮釋迦尊

五濁惡世ノ能化ノ主

大慈(悲)ワレヲラステズシテ

三途ノクルシミスキタマヘ

極樂世界の能化の衆<sup>(マヤ)</sup>

たとひ罪業おもくとも

來迎引接たれたまへ

(五) 歸命頂禮彌陀尊

極樂界會ノ能化ノ主

タトヒ罪業オモクトモ

來迎引接タレタマヘ

(13)・二尊の大悲をつたへて

あまねく衆生を化せすは

如海如山の恩徳を

我等いかてか報すへき

(六) 二尊ノ大悲ヲツタヘテ(モ)

アマネク衆生ヲ化セズバ

如海如山ノ恩徳ヲ

ワレライカデカ報ズベキ

(14)・釋迦の在世は過去ぬ

彌勒の出世は遙なり

彌陀の悲願をたのますは

我等か出離いかゝせん

極樂國彌陀和讃(千觀)に見える。  
第五句に「歸命頂禮彌陀尊」とあ  
つて、八句のものである。第二句  
「大悲」第四句「ぬき給ふ」第六  
句「能化の主」、第八句「引攝か  
ならず垂れ給へ」

二句、空也和讃⑩に見える。

四句「恩徳廣大」にわない。「恩  
徳讃小」に見える。空也和讃金澤  
文庫本伽陀集19に類似している。



(四) 佛果ノ廣海カハラネド  
因位ノ悲願ハ彌陀スグレ  
一子ノ慈悲ハオトラネド  
ヒカリハ念佛ノモノニサス

(三) 恩德

釋迦讚

(1) ・法藏佛の御もとにて  
難化の娑婆にとまりしも  
ひとへに我等がため也き

(一) 法藏佛ノミモトニテ  
五百堅固ノ願ヲタツ  
難化ノ娑婆ニトドメシモ  
ヒトヘニワレラガタメナリキ

(2) ・三僧祇耶劫のうち  
三千大千界のうへ  
諸佛に超たる萬行も  
難行苦行懈らず  
身命捨ぬ所なし  
偏に我等が爲なりき

(二) 三僧祇耶劫ノウチ  
難行苦行オコトラズ  
三千大千界ノウヘ  
身命ステストコロナシ  
諸佛ニコエタル萬行モ  
ヒトヘニワレラガタメナリキ

(3) ・百劫修相圓滿し  
八相一期の變現も  
光明神通具足して  
ひとへに我等が爲也き

(三) 百劫衆相圓滿シ  
光明神通具足シテ  
八相一期ノ變現モ  
ヒトヘニワレラガタメナリキ

(4) ・寶成五百のむかしより  
番々世々の成道も  
娑婆の化導絶すして  
偏にわれらかためなりき

(四) 寶成五百ノムカシヨリ  
娑婆ノ化導タエズシテ  
番番世世ノ成道モ  
ヒトヘニワレラガタメナリキ

(5)・地獄鬼畜の中にして  
罪苦の衆生にかはりつゝ  
塵點劫數を送りしも  
ひとへに我等が爲也き

(五)地獄鬼畜ノナカニシテ  
罪苦ノ衆生ニカハリツツ  
塵點劫數ヲオクリシモ  
ヒトヘニワレラガタメナリキ

(6)・我等か久しき輪轉は  
如來のふかき恩徳は  
かなしみても又限りなし  
報しても猶あまりあり

(六)ワレラガヒサシキ輪轉ハ  
カナシビテモマタカギリナシ  
如來ノフカキ恩徳ハ  
報ジテモナホアマリアリ

(7)・初成道のあしたより  
入涅槃の夕へまで  
説をき給へる教行も  
偏にわれらか爲なりき

(七)初成道ノアシタヨリ  
入涅槃ノユフベマデ  
説オキタマヘル教行モ  
ヒトヘニワレラガタメナリキ

(8)・日々三時に身を捨て  
兩肩頭頂に荷戴して  
恒沙劫をはかさぬとも  
報謝せん事猶かたし

(八)日日三時ニ身ヲステテ  
百千劫ヲバオクルトモ  
兩肩頭頂ニ荷戴シテ  
恒沙劫ヲバカサストモ  
一念一時ノ恩徳ヲ  
報謝セムコトナホカタシ

(九)カミハ有頂ノリモノウヘ  
シモハ阿鼻ノソコマデモ  
苦海ノ群類コトゴトク  
利益アマネクオヨボサム

恩徳讃小

(9)・恩徳廣大尺迦尊は

我見是刹と説玉ひ

安養能化の彌陀佛は

常念我名と演給ふ

(10)・諸佛同時に釋迦をほむ

五濁惡世の中にして

信しかたき法をとき

あまねく念佛勧るを

(11)・彌陀は我等かためにとて

微妙の淨土を莊嚴し

釋迦は我等をすゝめんと

難信の法を説たまふ

(12)・慈父の釋迦はまのあたり

我等かために法をとき

悲母の彌陀は懇に

われらかために願をたつ

(13)・彌陀超世の大願を

我等が爲におこすとも

釋尊是を勧めすは

いかてか淨土に生るへき

(一) 恩徳廣大釋迦尊ハ

我見是刹トキタマヒ

安養能化ノ彌陀佛ハ

常念我名トノベタマフ

(二) 諸佛同時ニ釋迦ヲホム

五濁惡世ノナカニシテ

信ジガタキ法ヲトキ

アマネク念佛ススムルト

(三) 彌陀ハワレラガタメニトテ

微妙ノ淨土ヲ莊嚴シ

釋迦ハワレラヲススムト

難信ノ法ヲトキタマフ

(四) 慈父ノ釋迦ハマノアタリ

ワレラガタメニ法ヲトキ

悲母ノ彌陀ハネムゴロニ

ワレラガタメニ願ヲタツ

(五) 彌陀超世ノ大願ヲ

ワレラガタメニオコストモ

釋尊コレヲススmezハ

イカデカ淨土ニウマルベキ

(14)・縦釋尊世にいて

難化の衆生をすゝむ共

彌陀の本願なかりせば

報土に生れむ事かたし

(15)・專念彌陀の教ひとり

さとりやすくて行安し

五濁の我等か爲にとて

釋迦は此法ひろむなり

(六) タトヒ釋尊ヨニイデテ

難化ノ衆生ヲススムトモ

彌陀ノ本願ナカリセバ

報土ニウマレムコトカタシ

(七) 專念彌陀ノ教ヒトリ

サトリヤスクテイリヤスシ

五濁ノワレラガタメニトテ

釋迦ハコノ法ヒロムナリ

イソゲヤイソゲヨモノヒト  
タマタマ彌陀ノチカヒアリ

二句、金蓮寺本に無い

(八) 釋迦ノ在世ハスギサリヌ

彌勒ノ出世ハハルカナリ

彌陀ノ悲願ヲタノマズバ

ワレラガ出離イカガセム

金蓮寺本釋迦に見える。空也和讃  
④、金澤文庫本伽陀集19に類似。

自信教人信

難中轉更難

大悲傳普化

眞成報佛恩

四句、金蓮寺本に無い。

金蓮寺本の釋迦わ、最初に「恩德廣大釋迦尊……」と讃じ、(2)「釋迦の教のなかりせば、久遠をば隔つとも、生死の夢のうちにして、一念覺悟いかがせむ」といい、(12)「歸命頂禮釋迦尊、五濁惡世の能化の主、大慈我等を拾ずして、三塗のくるしみ抜き玉へ」とゆう等、釋尊お能化の主として仰信している。ところが(3)「釋迦は慈父の如く」「彌陀は悲母におなじく」、(9)「釋迦の大恩山高く……彌陀の弘願海ふかし」と釋迦彌陀二佛の慈恩お感謝し、最後にわ「釋

迦の在世は過去りぬ、彌勒の出世は遙なり、彌陀の悲願をたのまずば、我等が出離いかゞせん」と専ら彌陀佛の悲願に歸依している。即ちこの和讃わ、釋迦一佛お讃仰する部分と彌陀一佛お讃仰する部分と、彌陀釋迦二佛お讃仰する部分とがあるのである。彌陀佛お仰信する者が、釋迦佛お彌陀教の開顯者、説示者として讃仰するのわ當然なことであるが、初めに「歸命頂禮釋迦尊……大慈我等を捨ずして、三塗のくるしみ拔玉へ」と言いながら、後に「釋迦の在世は過去りぬ……彌陀の悲願をたのまずば、我等が出離いかゞせん」と言うているのわ不合理であつて、一篇の和讃として内容的統一お缺いている。ところで釋迦彌勒の二佛中間の世に生れたことお歎いて「釋迦の在世はすぎ去りぬ、彌勒の出世は遙なり……」。その二佛中間の闇の世お、「救ひ給ふは彌陀ほとけ」と云つたり、「法華經のこみそ照し給へ」と言つたりする例わ數多く残つてゐる。ことに空也和讃にわ「釋迦の入日は西にさす、彌勒の出世はまだはるか、このほど長夜の闇の夜を、照らし給ふ彌陀ほとけ」とあるが、このような讃歌わ平安後期から鎌倉期にかけて一種の流行になつてゐたと考えられ、<sup>(註六)</sup>従つてこの(14)の四句わ他の和讃類から混入したものであらうと推定して誤りわないであらう。また(7)「ほと阿難に」以下七句、(9)「釋迦の大恩」等の二句、(13)「如海如山」等の二句わ空也和讃にも見え、(12)「歸命頂禮」等の七句わ極樂國彌陀和讃にも見える。してみるとこの和讃も、或る個人の創作でわなくて、多數の人がいろいろな和讃お誦誦してゐるうちに、いつとわなくできたものであらうと推測せられるのである。そしてこの和讃が「釋迦」と題せられ、始の部分わ「釋迦」の題にふさわしい内容のものであることお思うと、この和讃わ、もと専ら釋尊お讃仰したものであつたのであらうそれわ淨土教的立場でわなかつたであらう。そこえ淨土教の教主としての釋尊、二河譬に於ける發遣の釋迦が加わり、自然の勢で招喚の彌陀が加わつて、原形の「釋迦」が變質したのでわなかるうかと思われる。

淨業和讃の恩徳讃大の本文の(㉞)「貪瞋フタツノナガレ……」わ次の(㉟)と同じく二河譬お述べただけである。最後の一章わ彌陀の本願お讃嘆したもので、「釋迦」の最後の章と、言葉わ全く異なるけれども趣旨に於いてお格別異なつてもない。従つて一篇の和讃とし内容の統一に缺けていることお同様である。これお恩徳讃と改めたのわ但し、恩徳讃と呼ぶことわ室町期に遡るようである。前記、慶長四年書寫の和讃の本作の部に「恩徳」が二篇あるが、それわ淨業和讃の恩徳讃大、同小に當るものである。「釋迦」とゆう題號が内容に對してふさわしくないことに氣付いたからであらう。然し和讃の内容に統一がないから、「恩徳」と改めても内容にふさわしい題であるとわ言い難い「恩徳」とゆう題わ本文の最初の語によつたものかとも思われる

次に金蓮寺本の「恩徳」わ、前半三十六句お通佛教の立場から釋尊の恩徳お感謝したもので、八章のうち六章までわ「ひとへに我等がためなりき」お結句にすえてある(残りの二章は「報じても猶あまりあり」「報謝せんこと猶かたし」と結んでいる。)ところで後半の二十六句わ、淨土教の立場から釋迦彌陀二尊の恩徳お感謝したもので、後半の第一句わ(9)「恩徳廣大釋尊は」とあるが、これわ一篇の和讃の冒頭の句としてふさわしいものである。そして後半の部分にわ「ひとへに我等がためなりき」とゆう句わ用いられていない。これらの點から見ると、この和讃わ元來わ二篇であつたのであらうと思われる。淨業和讃でわ前半お「釋迦讃」とし、後半お「恩徳讃小」としているが、前半お「釋迦讃」と題することわ、内容から見ても自然であるから、これわ恐らく古い傳統に依るのであらう。但し「釋迦讃」の最後「カミハ有頂ノクモノウへ……」わ前章の「……報謝セムコトナホカタシ」と若干の關連わ感ぜられるけれど、その接續のしかたにわ不自然なものが感ぜられる上に、この四句わ「來迎和讃」の中にも見えるものであるから、恐らくわ來迎和讃の句が混入したのであらうと考えられる。金蓮寺本「恩徳」の末尾(㉞)「專念彌陀の教ひとり……釋迦は此法ひろむなり」わ、一篇の結末としてわ、やゝ力が弱いようで、この後になお句があつたのが脱落したのでわないか

と思われるが、淨業和讃の恩徳讃小の末尾もこの和讃の原形とも考えられない。(4)「イソゲヤイソゲ……」など近世的な感じがするし、(5)「釋迦ノ在世ハスギサリヌ……」わ前記金蓮寺本「釋迦」の末尾にあつたもので、空也和讃その他にも類似の句があり、内容的に、この和讃の文として不適當なものと考えられるからである。

三 (三)阿彌陀經、(四)涅槃、(五)八相、(六)末法、(九)滅罪、

(四)心品、(六)太子、(三)本願、(四)光明

以下も金蓮寺本お本文とし、淨業和讃の文との差違は校異の形で右傍に細記するに止める。但し假名遣の違い、漢字と假名との違いなど、文意に直接關係のないものはつとめて省略することにする。

(三)阿彌陀經 (14)小經讀本云阿彌陀經

(1)・是より西方十萬億 佛土を過ぎて世界あり

彌陀といへるは教主なり いま現在に法をとく

(2)・其土の衆生一人も 衆苦ある事更になし

只タダもろくの樂をうく このゆへ極樂國といふ

(3)・七重寶樹と木を名付ナツケ 八功德池といけをいふ

寶樹殊網にかざられて 寶池は金沙にかゝやけり

時宗の本作の和讃

四句、金蓮寺本「極樂」に見える。

(4)・四邊の階道こと／＼く

金銀瑠璃を合成し

うへに樓閣かさなりて

皆又七寶ましへたり

(5)・池の中に蓮花有

車輪是をたとへとす

青黃赤白一々に

色と光とともにならん

(6)・清淨衆徳無量の

妙香ありて莊嚴す

知へし極樂世界には

これらの功德成就せり

(7)・又彼佛の國土には

常に天の樂をなす

晝夜六時に微妙の

曼陀羅華ふりくたる

(8)・其土の衆生人天は

清旦毎に花をもて

他方界の諸佛に

供養歴史親近す

(9)・即 食事スナハチに成ぬれは

本土にかへりて飯食ヘシす

知へし極樂世界には

此等の功德成就せり

(10)・又彼佛の國土には

種々奇妙の衆鳥あり

白鵠孔雀鸚鵡等

乃至加陵頻加也

(11)・この鳥皆これ彌陀佛の

變化所作の鳥なれば



此こゑきく者自然に

三寶念する心あり

へこの聲（こゑ）者自然に

念三寶の心をなす

しるへし極樂世界には

此等の功德成就せり

(12) 微風寶樹をうこかせは

寶花に種々の響あり

たとへは萬種の音楽を

同時になすが如くなり

(13) 彌陀佛の光明は

十方世界を照曜し

礙（さ）する所なきゆへに

號して阿彌陀佛といふ

(14) 又彼佛（マカノホトケ）の壽命は

無量無邊（阿）僧祇劫（號）

人民おなしく長ければ

名付て阿彌陀佛と云

(15) 成佛以來をかそふれば

十劫すてに經給（へ）へり

無數の聲聞弟子ありて

阿羅漢道（ジ）を成就せり

(16) 大菩薩衆おほくして

其數さきの如くなり

しるへし極樂世界には

これらの功德成就せり

時宗の本作の和讃

コノコエキクモノ自然ニ  
念三寶ノココロナス  
シルベシ極樂世界ニハ  
コレラノ功德成就セリ

四句、金蓮寺本にわ四句前にあ  
る。

四句、淨業和讃にわ四句後にあ  
る。

(17)・極樂國土の衆生は

世界

みなこれ阿鞞跋致也

一生補處に至るもの

説ともく盡かたし

(18)・衆生是をきゝ得つゝ

かの土の往生願へし

如<sup>カクノゴトキ</sup>此の善人と

一處に會してあればなり

(19)・但無爲<sup>タダシ</sup>界なれば

少善うまるゝ事かたし

彌陀の名號執持して

一日七日亂れされ

(20)・其人<sup>ソノ</sup>命終する時に

佛と衆生と現前<sup>顯現</sup>し

この時身心やすくして

則かの土に往生す

(21)・本師釋尊まのあたり

此事を見て説玉ふ

一切衆生かの國に

生せんことを願へし

(22)・六方恒沙の諸佛も

舌相<sup>舌</sup>を出して證誠す

汝達<sup>ナムダチ</sup>衆生みなまさに

いまこの所説を信受せよ

(23)・此説<sup>カナナ</sup>彼名をきく者は

諸佛如來に守護<sup>レ</sup>せらる

阿耨菩提の中にして

なかく不退轉を得ん

(24)・既に生れいまむ<sup>ウ</sup>まる

未來も必ず生すへし

若男若女ねかはくは

ゆめくおこたる事なかれ

(25)・如來出世せし事は

この法と<sup>ム</sup>かんかため也き

衆生信じかたければ

難信の法とそ名付たる<sup>(ナシ)</sup>

「阿彌陀經（小經讚）」は、その題號の如く阿彌陀經に依る讚詠である。平板なものでわあるが、一篇の和讚としてはほぼ整うた形お有つて思うに思われる。「阿彌陀經」でわ(1)が八句一章になつて居り、「小經讚」でわその後半が(12)の次に來て一章お成している。(11)お八句のものとしてみると、第三、四句と第五、六句が重複しているように感ぜられる(第五句は恐らく「この聲きく者」の「きく」が脱落しているであろう)。(24)「本師釋尊……」の四句わ小經讚ににわ見えないが、これわ意味から考えると「小經讚」が脱落したのであらうと思われる。ともあれ「阿彌陀經」と、「小經讚」との差違わ少ない。これわ室町期以後、この和讚の本文があまり動搖しなかつたからであらう。全體が説明的で平板なものであるが、一應とこのうていようにも見える。然し「……衆生信じがたければ、難信の法とぞ名付たる」で終つてゐるのわ不自然であらう。この最後の一章わ他の和讚から附加せられたのでわないかと思われる。

#### (四)涅槃 (23)涅槃讚

(1)・常住壽命を聞しかと

却後三月<sup>ミツキ</sup>におとろきぬ

住 重閑堂の轉法輪

涙を催す基<sup>モト</sup>なり

時宗の本作の和讚

(2)・いつしか雙樹林のもと 純陀長者か施<sup>ウケ</sup>を受けて

最後の法門説しにそ 闍王は無根の身<sup>信</sup>をえし

(3)・最後の度者の須跋陀羅 如來の涅槃をかなしみて

世尊を留め先立<sup>サキダテ</sup>て みつからすゝみ滅度しき

(4)・阿難尊者は迷悶し 已滅不滅も知さりき

阿泥盧頭にすゝめられ 涙<sup>スゲヒ</sup>を拭<sup>ヌグヒ</sup>て請問す

(5)・如來滅度の後には 誰をか師とは憑むへき

諸經の始の言葉<sup>コトバ</sup>をは 何とか是を唱<sup>トナ</sup>ふへき

(6)・佛阿難<sup>ホトケ</sup>にのたまはく 波羅提木叉を師とすへし

諸經の始の言<sup>コトバ</sup>をは 如是我聞と案<sup>安</sup>すへし

(7)・滅後の遺誡ねんころに 一日一夜に説<sup>トキ</sup>はてぬ

僧伽梨衣を引おほひ 枕を北にそ臥給ふ

(8)・四雙の樹<sup>ウツキ</sup> 枯<sup>カシ</sup>はてゝ 枝をあはせてたれおほふ

跋提河には水むせひ 耆闍崛山には草枯<sup>クサカレ</sup>ぬ

(9)・頻婆羅崛の曙に

草木の枯しをあやしみて

迦葉尊者は座を起て

はるかに佛所におもむきぬ

(10)・曼陀羅花を持人の

みちに逢るに尋ねれは

しらすや佛の入滅に

諸天の散する花也き

(11)・迦葉尊者は是をき

涙に咽ひ地にふしぬ

漸く立てゆく程に

六群比丘に又あひぬ

(12)・迦葉いよ／＼かなしみて

佛所に至て禮すれば

紫金の姿は目に見えず

悲泣の聲そ耳にある

(13)・金棺はかりをめくりつ

最後の相好望しに

千  
旋輻輪の印文を

出して迦葉に見せしめき

(14)・如來無上の大慈悲

こゝろも詞もおよはれす

いへは涙を催して

戀慕の心そまさりける

(15)・釋尊かくれまし／＼て

二千餘年までに成

正法日々に沈淪し

賢聖なかく隔りぬ

時宗の本作の和讃

第二句以下三句「末法」の文とは  
ば同じ。

(16)・十惡<sup>サカリ</sup>盛に流行して

功德<sup>ハヤシ</sup>の林も枯<sup>カレ</sup>はてぬ

自界他界の諸聖衆

いかなる雲<sup>(ケル)</sup>にか隠<sup>カクレ</sup>れにし

(17)・如來化導<sup>コトヲヘ</sup>事畢て

沙羅林樹にかくれ<sup>シニ</sup>にき

衆生の明眼きえはてゝ

長夜の闇そいとふかき

(18)・如來在世の當初<sup>ソノマヅ</sup>は

人天大會こと／＼く

生死の牢獄<sup>ステ</sup>捨はてゝ

解脱の宮にそ遊びける

(19)・我等其時しらさりき

いかなる惡趣<sup>シツミ</sup>に沈<sup>シヅ</sup>てか

廣大慈悲の利益にも

もれてはひとり留<sup>トド</sup>まれる

(20)・おもへは須跋<sup>板</sup>梵士か

昏迷悶絶やすからず

ほとけの滅度に先立<sup>ツキダテ</sup>て

則<sup>スナハチ</sup>涅槃に入にしも

(21)・最後の化導に預<sup>アツカリ</sup>て

第四應果にさだまりぬ

かれなほ悲涕啼泣す

我等何をか憑むへき

(22)・僧伽梨衣をぬきさけて

紫磨の相好見せしより

三千界の地の上に

八十種好かくれにき

(23)・われらは生死の凡夫也

解脱の道に力なく

一句一偈の縁あれと

還りて三途に入ぬへし

(24)・阿難の七夢顯<sup>うつ</sup>れて

生死の苦相顯<sup>うつ</sup>現<sup>ス</sup>し

こひねかはくは無上尊

我等を捨つる事なかれ

(25)・鶴林中夜の春の花

二千餘年の霞わけ

龍華下生の秋の月

五十六億雲へたつ

(26)・鷲峰<sup>う</sup>の法にも早くもれ

龍花の曉はるか也

此中間<sup>コナ</sup>に生をうけ

なかく出離の縁そなき

(27)・戀慕のおもひ類<sup>なぐ</sup>なく

孤<sup>孤</sup>露<sup>(孤カ)</sup>の愁<sup>し</sup>去りかたし

常在靈鷲<sup>トキ</sup>と説おけと

相好色身なとや見ぬ

淨業和讃でわ、この涅槃讃わ全く諷誦しないことになつて居り、天明の寫本にわ、除かれている。涅槃讃お諷誦しなくなつたのわ、いつからであるのか、自分わいまだこれお明にしていなが、涅槃讃が金蓮寺本の涅槃に比して四

冥ヨリ冥ニイリスレバ  
佛法僧ニアヒガタシ  
釋尊大利ヲホドコシテ  
コノタビカナラズヌキタマヘ

四句、金蓮寺本にわ無い。涅槃和讃と一致する。但し第四句「このたび苦しむ」

十二句、四座講式の涅槃和讃に見える。

第一、二句、金澤文庫本伽陀集に類似。

句だけ多いことお問題外に置いてみると、句の順序は全く同じく、語句の差違も極めて少いのわ、この和讃が比較的古い時代（室町期？）から諷誦せられなかつたために、和讃の本文が動搖しなかつたのであらうと考えられる。

ところでこの和讃わ(1)「常住壽命を聞きしかど、却後三月におどろきぬ」と始つてゐるのわ、いかにも唐突で、他の和讃の途中から切り取つて來たような感じがし、終りの(27)「……常在靈鷲と説おけど、相好色身などや見ぬ」も、もつと續くべき語があるのが、途中で切られたように感ぜられる。また、この和讃は前半五十六句は釋尊の入滅を描いてゐるのに、突如として(15)「釋尊かくれまし／＼て、二千餘年までに成」と、鎌倉時代の日本佛教徒の釋尊追慕の情が述べてゐる。しかもその直後に、また(17)「如來化導事畢へて、沙羅林樹にかくれにき」と入滅のことお述べ、再び鎌倉的な立場で(24)「こひねがはくは無上尊、我等を捨つる事なかれ」と釋尊に救済お願つてゐる。しかもその次にわ(26)「鷲峰の法にも早くもれ、龍花の曉はるか也」と二佛の中間に生れた悲しみお述べてゐるのであつて、思想内容に一貫したものが無い。後半の「釋尊かくれまし／＼て」以下の五十二句の中、四座講式の涅槃和讃と一致するものが、六章二十四句（淨業和讃の涅槃讃は更に一章四句多い）あり、金蓮寺本の「末法」と一致するもの三句、金澤文庫本の「伽陀集」と類似の句もある。なおこの和讃は淨土教的色彩がほとんど見えないことも注意せられる。これらの點から見て、この和讃は恐らく時宗の成立以前に他の宗派で用いられてゐた幾篇かの和讃が混交したものであらうと考えられる——なお次の「八相」参照——

(五) 八相（(22) 八相讃）

(1)・鶴林雙樹の春の空

二月十五のあかつきに



聲光あまねく十方の

五十二類をおとろかす

(2)・憐愍救護衆生者

大慈大悲の能化の衆主

涅槃の時分至りつゝ

今日滅し給ふへし

(3)・時に菩薩人天衆

乃至禽獸魚蟲等

をのく供具を捧つゝ

雙樹の間に雲集す

(4)・幢幡寶蓋諸妙具

大地虛空に遍滿し

自界他界の凡聖衆

十二由旬にみちみてり

(5)・如來大會の中にして

相好色身いくしく

大梵迦陵の御聲にて

最後の法門説玉ふ

(6)・世間有爲の諸法は

生あるものは皆滅し

會逢ものは別離あり

常住なる事一なし

(7)・六趣四生の諸衆生

佛性おなしく備れり

如來は常住不變にて

變易ある事更になし

(8)・滅後の衆生一心に

放逸邪見とめつゝ

心性佛性あらはして

三典四德を證すへし

時宗の本作の和讃

(9)・我いま涅槃に入ぬとも  
汝達かなしむ事なかれ

戒定智恵を修學せは

在世にことなる事あらし

(10)・一期の化導此時に

機縁すてに極りぬ

八音哀雅の法の聲

聽聞けふを限りとす

(11)・漸く中夜に至りつゝ

涅槃の時分近づけは

紫金の胸を願して

大會に示してのたまはく

(12)・往昔塵點劫海中

衆生のために勤苦して

いま此清淨殊妙の

相好色身成就せり

(13)・諸行はかならず法爾也

生滅さらにとゞまらず

こよひ滅度し終なは

なく二たひ逢かたし

(14)・大衆心をひとつにて

最後の相好拜禮へし

目暫も捨すして

懇重恭敬を致すへし

(15)・時に大會涕泣し

合掌恭敬讃嘆す

則法衣をひき覆ひ

漸く床に臥給ふ

(16)・青蓮ノハナシ 眸メ なくとち

大慈大悲の恩徳の

丹菓クチャビルイハタエの唇 息絶ぬ  
へたゝりぬるこそかなしけれ

(17)・阿泥盧頭その時に

大覺世尊いま已に

衆會に告てのたまはく  
大涅槃に歸し給ふ

(18)・人天大會ゴレ是をきゝ

山河大地みなともに

涕泣悶絶裂悲涌かきりなし  
震烈飛踊やすからず

(19)・あるひは大地に身を没ナゲて

或はたかひに手を取て

みつから髪をぬくもあり  
啼哭鳴咽するもあり

(20)・天龍八部の愁涙は

夜叉羅刹喘の歎息は

大地になかれて河となり  
虚空にみちて風と成ナル

(21)・阿難は身心迷悶し

摩耶は大地に身をなけて

前後更ナリにわきまへす  
血淚雨ナリの如くなり

(22)・沙羅雙樹のかせの音

拔提銀河の波の色

別離の響あらたなり  
悲惱のおもひそ顯るゝ

(23)・すなはち紫磨の色身ニを

淨浄上妙細毘毘まとひとつゝ

阿難羅云もろともに

金棺にこそおさめけれ

(24)・妙香樓<sup>高莊</sup>を庄嚴し

聖棺<sup>サカゲ</sup>これを捧<sup>ササゲ</sup>おく

栴檀香をつみ木とし

如來の身を茶<sup>(マ)</sup>毘<sup>シ</sup>す

(25)・七日七夜ふるほとに

闇維<sup>タキキ</sup>の薪<sup>タキ</sup>皆盡ぬ

三十二相の妙躰は

無餘<sup>クブリ</sup>の煙とのほりにき

この和讃わ金蓮寺本、淨業和讃、ほとんど全く同じである。涅槃お詠じた和讃わ、前記「涅槃(讃)」お始め幾種類もあるが、この和讃わ最もよく整うていように見受けられる。尤も(25)「……無餘の煙とのほりにき」で終つてわ入涅槃の事實わこれで終つていられるけれども、一篇の和讃としてわ、もの足らぬものが感ぜられ、(1)「林鶴雙樹の春の空……」とゆう冒頭の文も一篇の和讃としてわ、やゝ唐突に思われる。それよりも「八相(讃)」と題せられているのに、和讃の内容わ入涅槃の一相だけであるのわ何故であるのか、とゆう事の方が大きな問題である。八相の一々お詠じた和讃があつて、その中の入涅槃の一相だけが残つたのであろうか。もしそうであるのならば、冒頭末尾のものたらなく感ぜられる事も自然に解釋できることになる、私わ嘗つて源信僧都の八塔和讃の行方お探つて、四座講法則に載つている「舍利和讃」(入涅槃お詠じたもの)が、その一部分でわないかと推測したことがあつた。八相おそれぞれに詠じた和讃があつて、その大部分わ失われても、入涅槃の部分だけわ年々の涅槃會に——涅槃圖(像)の前で——詠せられたために殘存したとゆう可能性わ考えられる。前記の「涅槃」も八相和讃の中の「涅槃」の部が殘存したのでわないかと思われる。

(八) 末法 (19) 末法讃

仰第五句以下だけ、「末法」と「末法讃」とお上下に對照し、他は末法の本文の右傍に末法讃お校異の形で示した。なお末法讃にのみある最後の八句は下段に掲げた。

- (1) ・如來舍衛國にして  
九億の家イの三億は  
二十五年を経しかとも  
きかずしらてそ止にける
  - (2) ・知へし見佛聞法の  
因緣ハナハダ甚あひかたし  
我身ワガミのはてこそ悲しけれ
  - (3) ・孺童菩薩はあなかに  
半偈の爲に身を投ぎ  
般若を求て肝ヤミをさく
  - (4) ・菩薩大聖ナホ猶ナホしかり  
沉や濁世の凡夫をや
  - (5) ・罪業いかなる雲なれは  
生死いかなる里サトなれは  
いはむや滅後の衆生をや  
眞如マノラバノ月輪カク隱すらん  
ほとけの月輪カク隱すらん
  - (6) ・忉利の安居九十日  
如來住ニことなかるらん  
それにも我等は逢さりき
- 提河の滅度は二千年  
わつかの末にそ生たる

四句、四座講式の涅槃和讃に見え  
る。但し第二句「佛の月輪かたも  
なく」

(7)・如來の滅度タツメを尋タツメれは 二千餘年サヘダテタリまでになる

正法日々に沈淪し 賢聖なく隔りぬ

(8)・正像はやく暮はてゝ 生死スミカヤミの栖閣スミカヤミふかし

末法すてに至りつゝ 菩提の道こそ遙なれ

(9)・種々の法門みな共に 解脱はいつれもおとらねと

末代惡世(濁イ)の根機スグには 念佛往生勝スグれたり

(10)・末法まさに時いり 惡世は五濁さかり也

淨土の一門はかりこそ 我等か入へき道ときけ

(11)・金容梵音見すぎかす 在世セシの正機スグに漏シたれと

聖教御名にあひ彌宅ミヤにあふ 猶これ宿緣スグ浅からず

(12)・釋迦の末世ウツレキの生來ナマレて 彌陀の名願スグきく者は

知へし往生淨刹スグの 根機スグ熟せる人なりと

(13)・正像兩時にくれたる 事は恨みに似たれとも

末法有緣スグの教法に あへるのみこそ嬉しけれ

「涅槃」(俗)と類似

(14)・我等がこゝろ愚癡にして 曠劫流轉の身なれとも

たま／＼釋尊末法の

遺教にこそ逢にけれ

(15)・末法萬年過て猶

此經百歲とゞまらん

その時一たび聞人も

皆彼國に生るへし

へ末法萬年

餘經悉滅

彌陀一教

利物偏増

へ彌陀の名號なかりせば

尺尊なにをかとゞめまし

(16)・末法一萬歳の時

餘教諸論は滅すとも

彌陀の一教とゞまりて

いよ／＼ひとへに利益せん

(17)・末法一萬年

餘經悉滅盡

阿彌陀一教

利物偏増上

へ當來之世經道

滅盡我以慈悲

哀愍特留此經

止住百歲其有

衆生值斯經者

隨意所願皆可得道

彌陀の一教とゞまりて

いよ／＼ひとへに利益せん

時宗の本作の和讃

(以下、九句淨業和讃)

當來之世經道滅盡  
我以慈悲哀愍特留  
此經止住百歲其有  
衆生值斯經者隨意  
所願皆可得度  
彌陀ノ一教トドマリテ  
イヨイヨヒトヘニ利益セム

四句、淨業和讃に無い。

二句、空也和讃に見える。第二句「釋尊何をか止め給はん」

四句、淨業和讃に無い。

(18)・五濁の浮世に生たる<sup>ウヤレ</sup>

うらみはかた／＼おほけれど

念佛往生聞時そ<sup>ナクトキ</sup>

還りてうれしく成にける<sup>カレ</sup>

西方淨土ノ眞門ハ  
アヒガタクシテイリヤスシ  
他力難思ノ本願ハ  
愚ヲモ 惡ヲモ 憊怒ス  
十惡トイヘドモ引接シ  
一念ナレドモ感應ス  
シルヤコレラノ悲願ハ  
タダ彌陀ノミゾオコシケル

八句、金蓮寺本にわ無い。

四句、金澤文庫本伽陀集41に見え  
る。但し第一句「引接ス」

金蓮寺本の「末法」と淨業和讃の「末法讃」とかなりの差違がある。先ず「末法」について見ると、この和讃の後半が甚しく混亂しているようである。「彌陀の一教とどまりて、いよ／＼ひとへに利益せん」が(16)と(17)に重出しており、(13)「正像兩時にくれたる……」と(18)「五濁の浮世に生れたる……」とわ、言葉が違うけれども内容が重複している。(15)「末法萬年……」と(17)「末法一萬年……」、(16)「末法一萬歳の時……」(15)「末法萬年過て猶……」等、ほぼ同意のことお四度もくりかえして居る。また(17)「當來之世……」わ大無量壽經の偈文でわない文お、意味に關係なく六字お一句にし、最後の一句わ八字にしているのも不自然である。(5)「罪業いかなる雲なれば……」の一節わ、四座講式の涅槃和讃と一致するが、この四句わ、末法讃の文としてわ前後の文と内容的に調和しないものがある。恐らくこれわ涅槃和讃の文が混入したのであろう。空也和讃と一致する(15)「彌陀の名號なかりせば、釋尊なにをかとどめまし」も或わ空也和讃から流入したものであろう。(2)「まして三途に沈なば我身のはてこそ悲しけれ」わ、意味が通



じないように思われる。淨業和讃の末法讃の方わ、やゝ整うていようでわあるが、終りの二章わ、元來この和讃の文か他の和讃類からの混入か、簡單にわ決定しがたいが―最後の一章わ、金澤文庫本伽陀集と一致する、然し伽陀集わ他の和讃類から一章二章と拔萃したものであるから、末法讃が伽陀集に先行するのであるうか。或わ末法讃、伽陀集に先行する他の和讃があつたと假定すべきであらうか。末法も末法讃も、すでに混亂した形のものであるから、一部分について他の和讃類からの混入か否かを論議しても、あまり意味がないように思う。

### (9) 滅罪 (18) 滅罪讃

(13)の後半だけ「滅罪」と「滅罪讃」お上下に對照して出した。

(1)・事理の懺悔を修せね共<sup>ドモ</sup>

彌陀の名號唱れは

四句、空也和讃<sup>18</sup>に見える。

一念須臾の間にも

無量生死の罪消ぬ<sup>ツキヤヌ</sup>

(2)・八萬四千の教門は

無明を滅せん爲也き<sup>タメナリ</sup>

四句、同前<sup>18</sup>

利劍卽是の名號は

たゝ一こゑに罪消ぬ

(3)・念々稱名常懺悔

頼みてもなをたのみあり

彌陀還念し給ひて

とゝまる罪障一なし<sup>ヒトツ</sup>

八句、同前<sup>18</sup>

(4)・一心に御名を稱すれば

念々の中にことゝく<sup>ウチ</sup>

八十億劫の罪滅す<sup>ツク</sup>

このゆへまさに念すへし

(5)・流來生死の罪業は

彌宅<sup>陀</sup>の名號唱れは

恒沙も喩にあらねとも  
須臾の程にそ滅しける

(6)・四重五逆の罪人の

一たひ南無と唱れは

永劫垢塵に沈めるも  
法性の身をそ證しける

(7)・懺悔も廻向<sup>回</sup>も發願も

安養能化の彌陀尊

口にはいへともまことなし  
他力をたれすはいかゝせん

(8)・抑彌陀の名號の

四重五逆も皆滅し

功能おもふそたのもしき  
九品の臺<sup>ウツナ</sup>に<sup>イタ</sup>のほるなり

(9)・本願清涼の風ふけは

女人五障の雲消て

生々世々に晴れかたき  
眞如の月影<sup>ヤドルナリ</sup>まとか也

(10)・十聲專稱風ふけは

一念深<sup>信</sup>心月すめは

五逆重罪雲消ぬ  
三有長夜の闇晴ぬ<sup>ヤミハレ</sup>

(11)・大悲利生の秋の風

攝取不捨の夜の月

塵沙の雲をや拂<sup>ハコフ</sup>覽<sup>ラム</sup>  
無明の闇をそ照しける

(12)・都ては業障深重の

闍提破戒<sup>ナレド</sup>の者也と

四句、同前⑧

四句、金澤文庫本伽陀集⑨に見え  
る。但し第一句「十惡五逆ノ」、  
第二句「久塵」、第三句「一度彌陀  
ヲ……」

四句、空也和讃⑩に見え。但し  
第四句「……のほるべし」、第三  
四句わ光明讃にも見える。

四句、同前⑥第四句「まどかなり」

八句、同前⑪但し第一句「十聲  
專稱の風」、第二句「……きん」、  
第三句「念信心」、第四句「やみ  
はれ」、第八句「照すなり」

大悲方便めくらして

引接かならず垂給ふ

(13)・衆生稱念するゆへに

多劫の重罪須臾にきゆ

ほとけと衆生と來時キタルトキ

諸邪業繫さふるなし

〽衆生稱念則除

多劫罪命欲終時

佛與聖衆自來迎接

諸邪業繫無能碍者

故名増上縁也

(以下八句淨業和讃)  
衆生稱念即除多  
劫罪命欲終時佛  
與衆生自來迎接  
諸邪業繫無能碍  
者故名増上縁也

多劫ノ重罪須臾ニキユ  
佛ト衆生トキタルトキ  
諸邪業繫サフルナシ

「多劫……」以下三句金蓮寺本に  
無い。

(14)・若人造五逆

得聞六字名

火車自然去

華臺即來迎

〽五逆つくれる人なりと

六字の名號唱れば

火車自然に去るのみか

花臺則來迎す

(15)・下品下生の衆生の

十惡五逆のみならず

一切不善を具足して

乃至一念懺悔せず

八句、空也和讃の處に見える。但し第一句「……衆生と」、第六句ほとけを稱せしめ」

四句、淨業和讃にない。

(16)・善友をしへて臨終に  
十こゑ御名を稱せしむ

則八十億劫の  
重罪滅して往生す

(17)・然に最後の念佛は  
滅罪の益勝れたり

石火の須臾に千草を  
焼よりも猶ほとそなき

(18)∴最後の稱名聲すみて  
化佛菩薩を見るのみか

十惡五逆雲消て  
日輪まちかくかゝやけり

(19)・法を唱る衆鳥は  
池のほとりに逍遙し

花を散する諸天は  
空の中にみちみてり

(20)・鳥の囀る聲きゝて  
晝夜六時を悟る也

花ふりしける上をゆく  
ふめとも本の如くなり

(21)・池には衆鳥むらかりて  
微妙の法門さへつれり

空には散花の天みちて  
教主を供養し奉る

(22)・百寶千寶具足せり  
七重寶樹の本毎に

化佛菩薩ましくて  
微妙の法門説き玉ふ

四句、同前⑮

四句、同前②但し第三句「……五  
逆の雲……」

「法を」以下十六句淨業和讃の滅  
罪讃にない。

「法を」以下四句、淨業和讃の極  
樂讃本に見える。

「池には……」四句、極樂讃末に  
見る。

「百寶……」四句、淨業和讃の極  
樂讃本に見える。第一句「……  
具足セル」

金蓮寺本の「滅罪」と淨業和讃の「滅罪讃」とわ、用語の差異を極めて少ないのに、「滅罪」に有つて「滅罪讃」に無い句わ二十句、反對に「滅罪讃」に有つて「滅罪」に無いのわ三句、都合二十三句の出入があるが、どうしてこのように大きな差違が生じたのであろうか。第二に、「滅罪讃」の最後、(18)「最後の稱名聲すみて、化佛菩薩を見るのみか、十惡五逆雲消て、日輪まぢかくかゞやけり」でわ一篇の和讃としての末尾が結ばれていない。「日輪」とわ來迎佛お意味するのであろうけれども太陽の意の如くにも聞える。(9)「眞如の月」(10)「一念深心(信)月すめば」(11)「攝取不捨の夜の月」など「月」わ度々用いられているが、「日輪」わここに始めて用いられているので、その意味お理解するのに困難お感ずる。「滅罪」に従つて、さらに十六句お加えてみると、末尾わいよいよ結ばれないことになる。第三に「滅罪」にだけある最後の十六句お暫く別にして、(18)までお讀んでみると、彌陀の名號お唱えることによつて多劫の重罪お滅することができると、その滅罪の功德お讃嘆していることわ明であつて、一章ずつについて見れば、内容表現ともにくぐれているが、全體としてみると、各章わ孤立していて、思想の展開わ認められない。これらわ一篇の和讃としてわ奇妙なことである。ところで先に注記しておいたようにこの和讃わ空也和讃と一致する句が驚く程に多い(五十六句)のであるが、この事と先に記した事お思い合わせてみると、これわ元來、一篇の和讃として何人かによつて製作せられたものでわなくて、空也和讃お諷誦しているうちに、いつ、誰がそうしたともなく空也和讃の一部が遊離し、これに若干他の和讃類が混入して一篇の和讃の如き形になつたのであろう。即ち先に記した<sup>(註)</sup>「無常(讃)」と同じ成立事情にあるものであろう、と考えられる。(13)「衆生稱念……」の文わ觀經疏定善義の文で偈文でわないのお、意味の續き方お無視して五句にしている(淨業和讃の方わ、形式だけは七言の如くになっている)のわ、「末法(讃)」に於ける大無量壽經の文に對する取扱と同様である。金澤文庫の伽陀集の中にもこのような形式の

ものがあるから（和漢朗詠集などの中にも散文の一節お取入れたものがある）、これわ平安朝以来の一つの手法であつたと考えられようけれど、和讃としてわ落ちつかないものが感ぜられる。

なお「滅罪」だけにある(19)「法を唱ふる衆鳥は」以下十六句わ、極樂の有様お述べたもので、(1)―(18)の念佛の滅罪の功德お讃詠して來た趣旨とわやゝ異なるものである。この十六句の中十二句わ淨業和讃の極樂讃本同末に見えるものである。思うにこれわ(18)「最後の稱名聲すみて、化佛菩薩を見るのみか……」と、念佛の行者が臨終に來迎お蒙ることお述べたので、それに引かれて、他の和讃類の文お附加して極樂淨土の有様お述べたのであらう。この展開のかたにも、空也和讃の(29)から(30)えの續き方の影響が感ぜられる。前に記した(14)衆生稱念則除云々の文わ、その直前の「衆生稱念するゆへに……」の典據であるが、和讃としてわ無くてよいものであらう。「滅罪讃」のみにある「多劫ノ重罪須臾ニキユ……」等の三句わ、定善義の文の譯であるが、この三句わ、その少しく前の文(13)と全く重複して、(13)「滅罪讃」のこの章わ同じことお三度くり返しているのである。このようなことわ、先にも述べたように、多數の人が唱和しているうちに自然にでき上つた和讃であるからであらうと考えられる。

(四) 心品 (30) 心品讃

(1)・八苦充滿のさかひにて 生を受けるはしめより

内外身心ことくく 苦ならずといふ事そなき

(2)・閑に我等がありさまを おもひとくこそかなしけれ

萬業煩惱ふかくして 三途沈没をはりなし

(3)・三業皆是罪なれば

四威儀も惡縁なる故に

(4)・過去無數の諸佛の

大慈大悲の利益にも

(5)・我等下界濁惡の

心は中道頓教の

へ中道頓教月くらく

永劫流轉いかゝせん

(6)・一日一夜をふる程に

念々毎になすところ

(7)・三惡道の因縁は

出離生死の惠業は

時宗の本作の和讃

(以下八句、淨業和讃本)

過去無數ノ諸佛ノ

六道四生ニヘダテナキ

大慈大悲ノ利益ニモ

モレケムコトコソカナシケレ

三業ミナコレツミナレバ

諸佛ノ方便チカラナク

四威儀モ惡縁ナルユエニ

衆聖(生イ)濟度ヲウシナヘリ

四句、次の四句と前後している。

(以下四句、淨業和讃本)

下界濁世ニ生レキテ

中道頓教ツキクラク

一生ノ怖望ツキザレバ

永劫流轉イカガセム

淨業和讃本わ「下界濁世ニ」の一  
句が多い。

(8)・縁務はとゝめ難くして 流轉の因とそ成にける

修善は心<sup>ココロ</sup>ものうくて 出離の縁なき我等也

(9)・忘念しはく移りきて 春の夢<sup>ナニ</sup>に異ならず

邪執しきりに積りて 冬の雪にあひ似たり

(10)・思ひと思ふ事はみな 流轉生死の業と成<sup>ナル</sup>

なけきと歎く事ことに 後世のつとめは一<sup>ヒトツ</sup>なし

(11)・いづれの時にか永劫の ふかき眠<sup>ネヅリ</sup>をさますへき

いつれの生にか長夜の むなしき夢<sup>イ</sup>とおとろかん

(12)・我等この度<sup>タビ</sup>いかにして 生死のきつなを離れまし

煩惱業苦の三障に つなかれたるこそ悲しけれ

(13)・我等いかなる身をもちて 法<sup>ホウ</sup>の爲には惜むらむ

事もなのめに思ひては 又もあふへき御法<sup>ミホウ</sup>かは

(14)・かゝる罪業おもき身の わつかの臨終の一念に

無爲の淨土に入らん事 おもへは過分の巨益也



凡夫淨土ニユキヌレバ  
曠劫塵沙ノツミキエテ  
六通具足シ自在ヲエ  
老病無常ノ苦ヲハナル

四句。金蓮寺本に無い。

「心品」と「心品讚」との差違わ、(3)と(4)が前後していること、(5)の「下界濁世ニ生レキテ」の一句の有無、最後に「凡夫淨土ニユキヌレバ……」の四句の有無の三點が目立つものである。(3)と(4)との前後わ、意味の上から見れば、特にどちらお先にしなければならぬというわけもないように思われるが、(2)「三途沈没をはりなし」の語感から言うと、(4)「過去無數の……」と續く方が自然であるように思われる。(5)わ「心品」でわ七句で一章になつてゐる。七句一章の例わ他にもある(「釋迦」(7)(12等)から、形の上から見て、一句脱落してゐると言えない。意味の上から見ると「下界濁世ニ生レキテ」わ(5)一二句お要約したものであるから、無くてもさしつかえないものである。最後の四句わ「心品」の趣旨からわ離れてゐるように思われる。(4)「……わづかの臨終の一念に、無爲の淨土に入らん事……」と淨土往生のことお述べたので、それに引かれて「凡夫淨土ニユキヌレバ……」と續けてたのであろう。従つてこの四句わ無い方が古い形であらうと思われる。この和讃わ用語も優雅であり、内容もとのうてゐるが、時宗でわ近世以來諷誦しないことになつてゐるのわ何故であらうか。或わ内容が餘りにも内省的で、暗い感じお與えるからであらうか。

(因)太子 (29)寶海讚具云寶海梵土

(1)・寶海梵士は釋尊の

初發道位の名字也

寶藏如來の御もとにて

我等を度せむと誓<sup>チカヒテ</sup>き

(2)・一千餘人新發心

をのく其土をすてし時

寶海梵士は涕泣<sup>啼</sup>し

如來に申て宣<sup>メウサマ</sup>はく

(3)・世尊<sup>ワガ身</sup>我心うこく事

緊手樹<sup>緊手樹</sup>琪樹壽林の葉の如し

こゝろも愁<sup>ナリ</sup>へ身も疲ぬ

娑婆を憐む菩薩なし

(4)・三業所修の福善<sup>ヲ</sup>は

罪苦の衆生に廻向して

かの土の衆生の苦患をは

われ是ひとりつくのはん

(5)・天上人中ことくく

教<sup>アサヒ</sup>になひき隨<sup>ナ</sup>ひぬ

輪廻の苦患をまぬかれて

成佛得道定まりぬ

(6)・多生曠劫<sup>屍</sup>へしかとも

大悲の利益<sup>ナカヒ</sup>は懈<sup>オロダ</sup>らす

頭目指骨王位等

衆生のねかひに隨<sup>ナ</sup>ひぬ

ワレイマチカフ苦ノ衆生  
一子ノ慈悲ヲホドコシテ  
菩提ノミチヲヲシヘテ  
六道衆生ヲ濟度セム

四句、「太子」にない。

(7)・鴿にかはりて尸毘王の

三千界も震動し

斤の上にのほりにぎ  
十方の諸天も悲啼しき

(8)・定壽大王身を施して

讐敵の害を受し時

長生太子に遺誠し

あたをむくゆる事なけれ

(9)・薩埵王子竹林に

飢たる虎を憐みて

雪の膚をほとこして

虎の前にそ臥給ふ

(10)・皇子の慈恩を悦ひて

餓ては力も盡ぬれと

はたへをねふり目をのへて

骸を破る事を得ず

(11)・王子いよ／＼慰みて

枯たる竹を刀とし

みつから膚をさし切て

その血を虎にそのましめす

(12)・身肉漸く盡ぬれは

衣は竹にそとゝまれる

みとりの髪は残れとも

玉の姿はかくれにき

(13)・時に大地震動し

月日もさらに光なし

空より種々の花ふりて

妙なるこゑ／＼讃嘆す

時宗の本作の和讃

(4)・夫人も王も諸共モロトモに

命をすてんとなしみてビキ

群臣諸民ことくく

悲啼涕泣かぎりなし

この和讃わ寶海梵士、尸毘王、長壽王、薩埵王子など、本生譚によつて釋尊お讃仰したものであるが、一篇の和讃としてわ、ととのうていない。最後の章「夫人も王も諸共に、命をすてんとなしみて、群臣諸民ことくく、悲啼涕泣かぎりなし」でわ、薩埵王子の物語も完結しているとわ言えず、「太子（寶海讃）」も中絶していると見なければならぬ。薩埵王子の部分わ、現存のものでも二十四句お費しているのに、尸毘王や長壽王の部分わ僅に四句ずつで、甚しく均衡お失つてゐるに思われるが、これで原作のまゝであるのかどうか、疑わしくも思われる。初の寶海梵士の部分も(4)「三業所修の福善は、罪苦の衆生に廻向して、かの土の衆生の苦患をば、われ是ひとりつくのはん」わ寶海梵士の誓願であるが、それについての行も證も言わないで直に「天上人中ことくく、教になびき隨ひぬ」とあつてわ話が飛躍してゐるに思われる。「寶海讃」わ「太子」よりも四句多く、言葉にも少異があるが、「太子」が既に崩れてしまつた形であると思われるので「太子」と「寶海讃」とどちらが正しいかを考察することわ、あまり意味のある事でないように思われる。

(三)本願 (31)本願讃

(1)・我世ワレヨに超えたる願をたつ 必ず無上道を得ん

この願満足せすは我

無上正覺成就せし

(2)・四十八の誓願は

僧祇劫の苦行も

衆生の爲におこしき

(3)・五劫思惟の本願の

十念成就の<sup>トセガラ</sup>輩の

ひとへに我等が爲なりき  
大智の光明あきらかに

(4)・四十八願ねむ比に

願に乗して生るれば

心の闇をてらす也  
濁世の衆生をよはふなり

(5)・弘誓は四十八なれと

ほとけも還て念しつゝ

罪  
財福多少も撰れす  
念佛はかりを顯して

(6)・彌陀の因地の本願は

一々誓願みな共に

念する人をそしらしめす  
其數四十八なれと

(7)・彌陀の本願多けれと

五劫思惟を尋ぬれば

念佛往生とこそきけ  
第十八こそ勝たれ

(8)・しかるを彌陀の本誓は

三念五念も縁により

たゝ十念の誓ひなり  
破戒重罪なほ捨す

かならず來迎垂給ふ

(9)・我もし成佛せん時に　わか名を稱せん諸衆生

十聲までも生れすは　正覺とらしと説王ふ

(10)・縱正覺なるへくは　大千界を感動し

虚空の諸天ことくく　妙なる花をふらすへし

(11)・時に大千感動し　微妙の法花亂ちり

空に自然の聲ありて　決定成正覺といふ

(12)・凡夫引接の思惟は　はるかに五劫を送りき

本願成就の正覺は　いま十劫を隔たり

(13)・法藏因行とをくして　乃往過去の昔より

彌陀證果の深き事　十劫以來の今ならむ

(14)・本願大悲の大地には　瓦礫もあへて嫌はれす

十惡五逆の草木も　無漏の花葉生長す

(15)・平等大悲の本願は　利益末法の時をさす

衆生の根機を選ねは　五逆闡提もみな生る

(16)・この故我等本願に

歸して御名を稱念す

佛語に虚妄なき故に

臨終の來迎うたかはす

(17)・上は一形至十念

三念五念も來迎す

直に彌陀の弘誓は

凡夫の念こそ生すなれ

この和讃も近世にわ諷誦せられなくなっている。金蓮寺本と淨業和讃との差違が少ないのわ、このためでもあらう。ところで専ら彌陀の本願お讃嘆したこの「本願(讃)」が何故諷誦せられなくなつたのであらう、と考えてみるとこの和讃が内容的にすぐれていないからでわないかと考えられる。最初の「我世に超たる願をたて、必ず無上道を得ん……」わ大無量壽經の三誓偈の冒頭の文によつて法藏菩薩の誓願お述べたのであるが、次の(2)「四十八の誓願は……ひとへに我等が爲なりき」わ衆生の立場から阿彌陀佛に對する感謝であつて、和讃の内容が著しく飛躍している。しかも遙に離れて(10)「縦正覺なるべくは、大千界を感動し、虚空の諸天ことごとく、妙なる花をふらすべし」わ三誓偈の末尾の文お典據とするもので、法藏菩薩の誓願であり(大千界を感動しわ、不十分なきいたであらう)(11)「時に大千感動し、微妙の法花亂れちり、空に自然の聲ありて、決定成正覺といふ」わ、三誓偈の直後に續く文に依るもので、法藏菩薩の誓願の成就お述べたものである。これらわ當然(1)に續くべきもので、(2)「四十八の誓願は……」わ(10)(11)の後にあるべきものであらう。この一事によつてもこの和讃わ甚しく順序が亂れていることが知られよう。第二にこの和讃にわ表現の不十分な句が多い。前記「大千界を感動し」もそうであるが、最後の章の如き「上は一形至十念」わ善導の「上盡一形下至十聲」の文に依るのでわあるが、「盡」「下」の文字お略したために意味が通じ難くなつてゐる。第二句に「三念五念

も來迎す」とあるが、それならば、十念と三念五念の關係わどうなるのであろうか、十念わ最低限度でわなないことになるのであろうか。第三四句の「直に彌陀の誓願は、凡夫の念こそ生ずなれ」も何お述べようとしているのか、このままでわ明でない。(9)「……十聲までも生れずば」の「十聲まで」わ下至十聲の意であらうけれど、この言葉でわそうゆう意味にわなりにくい。(10)「……彌陀の證果の深き事、十劫以來の今ならむ」とゆうのも、何お言おうとするのか明でない。(3)「十念成就の輩」とゆう語も、言おうとする意味が推測できないわけであらうけれども、甚だ不十分な表現である。要するにこの和讃わ金蓮寺本に收載せられる前に、既に崩れていたものであり、その表現も拙いものであつたのであろう。

(四)光明 (28)光明讃

(1)・彌陀の光明あまねく

十方無量世界の

念佛の衆生を照して

不捨攝取したまへり

(2)・正座十劫の昔より

慈光世界を照せり

光觸蒙る輩は

塵勞滅して往生す

(3)・稱名念佛の行者をは

攝取の光ぞ照しける

護念擁護の力にて

邪魔惡鬼に侵されず

四句、空也和讃⑤に見える。但し第二句「てらすなり」、第三句「ひかりをふる」ともがらと」



(4)・彌陀の光明無邊にて

三途勸苦の底までも

(5)・攝取不捨の光明は

觀音勢至の來迎は

(6)・光明十方をてらして

蓮臺九品にわかれて

(7)・彌陀の名號唱れは

煩惱さへてみえねとも

(8)・われ願くは生々に

なく生死の苦をいてゝ

至らぬ所そなかりける

光明テラシテひかりをみつれば罪消ぬ

念するとはそを照すなり

聲ヲタヅネテムカフナリにつゐていたる也

念佛の行者を皆攝し

破戒罪人猶生す

攝取の光そ身を照す

大悲喜かならずてらす也

佛ホトケにちかつき法をきゝ

彌陀の淨土の人たらん

(9)・光明攝取の名號の

四重五逆も皆滅し

功能おもふそたのもしき

九品の臺ウツナにイタのほるなり

時宗の本作の和讃

彌陀攝取ノ光明ハ  
餘ノ行者ヲバテラサズ  
觀音大士ノ蓮臺モ  
念佛ノモノヲゾノセタマフ

四句、空也和讃⑩に見える。但し  
第三句「勸苦」、第四句「光をみ  
つれば罪消えん」

四句、念佛假名法語所載來迎和讃  
に見える。第四句「聲を尋て迎ふ  
なり」

四句、空也和讃⑩に見える。第四  
句「破戒の罪人……」

第一、四句、空也和讃⑩に見える。

四句、金蓮寺本にない。

四句、空也和讃⑩に見る。但し  
第一句「そもそも彌陀の名號は」  
「滅罪」(8)にも見える。

(10)・歸命頂禮不斷光

攝取の光絶されは

臨終正念成就して

かならず不退の身とそ成

四句、淨業和讃本にない。空也和讃<sup>20</sup>に見える。但し第二句「……絶ずんば」

彌陀ノ威神光明ハ  
最尊第一ナルユエニ

諸佛如來ノ光明ノ

オヨブトコロニアラザリキ

臨終ニ彌陀ヲ念ズレバ

慈光キタリテミヲテラス

本願力ニノリテコソ

タカラノウテナニイリニケレ

以下八句、金蓮寺本「光明」にな

い。

四句、五増上縁師に見える。第三句「……によりて……」

「光明」にあつて「光明讃」に無いのわ四句、逆に「光明讃」にだけある句わ十二句、比較的短いこの和讃において十六句の出入があるのわ、大きな差違である。ところで「光明」わ四十句のものであるが、その過半わ空也和讃と一致し、來迎和讃と一致するものも四句ある。そして一篇の和讃としての思想體系お有つていない(8)の如きが最後にあれば一篇の結びにならうけれど、(10)では結ばれていない。従つてこの和讃わ前記「無常」「滅罪」などと同様の事情のもとに成立したものであらう。即ち空也和讃の光明に關する句お諷誦しているうちに、それが獨立し、他の古和讃の類似の句も併せ誦するようになってできたものであらう。

## 四 結 び

以上、金蓮寺所藏の「和讃」お中心にして淨業和讃に「本作」と標記せられている十六篇淨業和讃でわの十七篇になるの一つについて一應の調査お終つたので、ここにその結果お要約しておこう。

一 金蓮寺の「和讃」と淨業和讃との間で差違の少ないのわ、先にも記したように、(四)涅槃、(五)八相、(六)太子(寶海讃)、(七)本願の四篇であるが、このうち、涅槃、太子、本願の三篇わ淨業和讃でわ諷誦せられない部分に入っている。淨業和讃でわ、その収載している三十二篇の和讃の中で十篇が諷誦せられないことになっているが、この十篇の中にわ、金蓮寺の「和讃」と非常に大きな差違お有するものもある。この點から見ると、この十篇が用いられなくなつた時期わ同一でわなくて、早いものもあり、遅いものもあつたのであろう。そしてこの三篇わ、比較的早い時代から諷誦せられなくなつていたのであろうと想像せられる。八相だけわ後まで諷誦せられているが、これわ二月十五日の涅槃會にだけ用いられたものであるから、早くから特別なものになつていたために、本文が動搖しなかつたのであろう。即ち本文の差違が少くないものわ、差違の生ずる機會が少なかつたとゆうだけで、その和讃が原作の形に近いか否かとゆう事とわ、話わ別であらうと考えられる。

二 いわゆる本作の和讃わ、一篇の和讃として、内容に體系があり、首尾もとのつていゝと見うけられるものわ極めて少ない、とゆうよりも、一篇もない、とゆう方が事實に近い。これわ大きな驚きであるやうであるが、これが「本作」といわれる和讃のありのままの姿であるやうである。これわ(イ)他の和讃の一部が遊離して獨立したもの、(ロ)二種の和讃が混合したもの、またわ幾種かの和讃から適宜に章詞が抜き出されて一團になつたものであるためである

ように思われる。この點についても少し具體的に記るそう。

(イ) 滅罪、(ロ) 無常、(ハ) 光明の如きわ、その過半の章詞が空也和讃と一致する。尤も空也和讃わ、作者も製作年代も明でわなく、その本文も信賴するに足る古寫本も古板本も見出されていないので、明言することわできないけれども、空也和讃と他の多くの和讃類との關係から見ると、空也和讃わ平安末期以前のものと考えられ、宗教的にも文藝的にも傑作と稱すべき長編の和讃であつたと考えられる。この空也和讃の中で、念佛によつて多劫の重罪が消滅するその功德お讃仰した部分が遊離し、これに若干他の古和讃の文の混入したものが「滅罪」であり、同様に、有爲の世界特に人生の無常に氣付いて、驚き歎いた部分、また、阿彌陀佛の光明が遍く十方世界に光被して、念佛の衆生お攝取せられることお讃嘆した部分の遊離したものが中心になり、これに他の古和讃類の文が付加しておのずから一篇の和讃の如き形になつたのが、「無常」、「光明」であると考えられる。(ニ) 迎接わ空也和讃、來迎讃、極樂六時讃等の臨終來迎の部分が遊離し混合してできたものようである。(三) 「極樂」も亦、相似た事情によつて成立したものと考えられる。

(四) いわゆる本作の和讃の中にな、淨土教的なものと、そうでないもの——釋尊お追慕し、釋尊に救済お願うもの——とがある。(四) 「涅槃」わ右の後者に屬するが、前にも記るしたように、前半と後半とでわ作者の立場が違い、又後半にわ他の和讃と一致する章詞が多いから、二種またわ三種の和讃が混合したものと考えられる。(三) 「釋迦」(恩徳讃大) わ、始めの部分わ淨土教的でわないのであるが、途中から淨土教的なものが加わつてゐる。この淨土教的な部分わ空也和讃、極樂國彌陀和讃等と一致する章詞が多いので、それらと混交したものと考えられる。(三) 「恩徳」わ前半わ淨土教的でわないが、後半わ明に淨土教的であつて、趣旨が異なつてゐる。淨業和讃でわ前半わ「釋迦讃」、後

半わ「恩徳讃小」となつてゐる。この方が原作の形に近いのであらうと思われるけれど、これが原作の形のままとわ考え難い。(ㄆ)「五増上縁」も終りの方の三分の一わ他の古和讃が混入しているが、そのために、一篇の和讃としての趣旨が亂れている。

その他の(ㄎ)「末法」(末法讃) わ後半に著るしい混亂が見え、(ㄏ)「太子」(寶海讃)、(ㄏ)「本願」(本願讃) わ既に原形が崩れてしまつてゐるように見受けられる。(ㄏ)「阿彌陀經」(小經讃) わ一應ととのうてゐるようにも見えるが、原作のままとわ思われない。(ㄏ)「八相」のごときわ、或わ原作の形に近いのかも知れないと思われるが、入涅槃の一相お述べた和讃お何故「八相」と呼ぶのか、とゆう問題わ残るのである。

三 本作と言われる和讃の本文に、何故このように混亂が多いのであらうか——實わ新作と言われる一遍上人以下の作られた和讃にも混亂わ必ずしも少くないのであつて、本文の混亂わ時宗の和讃の一の大きな特徴とも言えると思ふ。その理由わ嘗つて記したこともあるが、これわ踊り念佛との關係によるもので、時宗教徒わ、合唱のために一章ずつわ暗記していたけれども、一篇の和讃としての思想體系にわ深い關心お有たず、導師の音頭のままに謠つたために、このようになつたのであると考えられる。

ところで、淨業和讃の本作の諸和讃わ、すべて金蓮寺の「和讃」から轉訛して行つたものであらうか。別の言い方おするならば、金蓮寺の「和讃」わ南北朝時代の時宗の和讃の定本的なもので、この「和讃」以外に、系統の異なる和讃わなかつたのであらうか、と考えてみると、たとえば、(ㄏ)涅槃、(ㄏ)八相、(ㄏ)太子、(ㄏ)本願の如きわ、金蓮寺の和讃系統のものが淨業和讃に傳つたと考えられる。しかし(ㄏ)恩徳と「釋迦讃」「恩徳讃小」との關係の如きわ、金蓮寺の和讃とわ別の系統のものが傳つていたと考えなければ、兩者の關係お説明することができないように思われる。こ

のような點を基礎にして、先に對比した兩者の差違お考えると、南北朝期の時宗の和讃わ必ずしも金蓮寺の「和讃」の系統だけでわなく、これとわ章詞の違うものもあつたのであらうと考えられる。

四 自分わ、淨業和讃だけお見ていた時代に、その本作と言われる十七篇の和讃のことごとくが作者不明であることに奇異の感お抱いたことであつた。一遍上人以前の和讃であるとすれば、作者不明のものもあるのわ、やむを得ない、然しその全部が作者不明であるという事について解釋することができなかったのであるが、金蓮寺の「和讃」と對照しつつ、他の古和讃との關係お考えてみると、これらの和讃わ個人またわ團體に於いて、創作、またわ既成のものお修正して作つたものでわなく、多數の人が既成のものお合唱しているうちに、前記のように、長い和讃の一部分が遊離したり、aの和讃にb cの和讃が混交したり、或わ章詞が脱落したり、或わ順序が亂れたりしながら、自然にできたものと考えられ、それゆえに、作者とゆうものわ初から無かつたものが多いのであらうと考えるに至つた。

五 右記の諸點から考えると、本作といわれる諸篇お、一遍上人以前のものとす言い傳えお、そのまま用いることわできない事に氣がつく。本作の諸篇わ、空也和讃、極樂國彌陀和讃、來迎和讃等々の古和讃お母胎にしているものが多いのであるけれども、それら古和讃から甚しく移動し混亂して原形お保っているものわ一篇もないようである。その動搖が停止し、一定の形にはぼ定着した時期わ、一樣でわなく、一部分わ比較的早く、南北朝期と考えられるものもあるが、室町期お經て、江戸時代に入つてもなお動搖し、淨業和讃の編纂に至つて定着したものもあつたように思われる。この點についてわ、まだ十分調査していないので、確言わできないが、新作の一遍上人の別願讃についてみると、聖戒の「一遍聖繪」六條縁起とも一遍上人繪詞とも言う、宗俊の「一遍上人縁起繪」、金蓮寺の「和讃」等に出ているものわ、いずれも七十句のものであり、賞山の別願和讃直談鈔正徹四年の序があるにも「凡此讃文、都有七十句。各以四句。而爲一讃。有

十七讃。但結一讃。爲<sub>三</sub>六句一讃<sub>二</sub>」と明瞭に記している。しかるに直談鈔より二年後にできた遊行四十九世一法の「一遍上人別願和讃新註」享保元年の序があるにわ終りに十六句追加して八十六句のものになつてゐる。「一遍上人語錄」、「一遍上人語錄詮釋」、「淨業和讃」わ、ともに八十六句の本文お用いている。別願讃の如き重要なものが江戸時代中期に蛇足が加えられ、それがそのまま傳つて來てゐるのであるから、以て大體の見當もつけることができようと思う。

六 淨業和讃で本作と標記している十七篇の和讃のうち八篇わ全然諷誦しないことになつてゐる——金蓮寺の「和讃」でわたしに諷誦してゐたと考えられるが——淨業和讃でわ諷誦しないことになつてゐる和讃わ右八篇と新作二篇と、全部で十篇ある。この數字だけお見ると、本作の和讃わ、甚しく輕視せられてゐる如くにも思われる。しかしこれわ、輕視して諷誦しなくなつたのでわないのである。江戸時代に入ると佛教の各宗派が教學お振興してゐる。時宗でも正徳・享保の頃に別願讃の註釋や一遍上人の語錄等お刊行してゐるが、落ちついて和讃お味讀してみると本作の和讃にわ、意味のとのわないものが多いことに氣付いたのである。その結果漸次それらわ諷誦しないことになつていつたのであらう、と思われる。

七 淨業和讃所收の本作の諸和讃について、從來わ江戸時代後期に刊行せられた淨業和讃の外に、これお考察すべき資料がなかつたのであるが、金蓮寺の「和讃」の出現によつて一舉に室町初期——南北朝期におけるこれらの和讃の實際の相お見ることができた。これわ時宗の和讃研究のためだけでわなく、廣く日本佛教讃歌の研究のために重要な意味お有つものである。本稿において、繁おいとわす、その本文お掲げたのわそのためである。

なお、言い漏らしたこともあるが、既に規定の紙數お越えたから、餘わ新作の和讃について記るす時に譲ることにする。

註

- ① 竹田實善氏「淨業和讃の成立」(雜誌「國文學踏査」昭和三十一年二月刊)
- ② 淨阿上人行狀(續群書類從卷二三)、淨土傳統總系譜
- ③ 器朴論要解
- ④ 拙稿「移動する和讃」(「國語と國文學」昭和三十三年四月號)
- ⑤ 拙稿「金澤文庫本伽陀集」(「佛教研究」昭和十三年十月號)
- ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑤に同じ。